

意。

【居るまゝにすなはち】 坐るや否や。

【なんでふことなき人】 何といふ取處もな
い人。

【すずろに】 むやみに。

【えがちに】 心得勝にて、何でも知顔するを
いふ。

【いつかは若やかなる人の、云云】 何時
若い人が、遠慮もなく人前にて、さる不作法
をしたか、しはしない。

【老いばみうたてあるもの】 年寄りじみ
ていやらしい者。

【居んとする所】 坐らんとする所。

【居も定まらず】 居すまひもきまらぬ。

【ひろめき】 ひろめくの轉語。ひらく／＼する
こと。即ちチラチラ動くこと。一説に廣めく

【狩衣】 もと狩りなどの時に着用せし服。古

への服の一。闕腋（ケツテキ）の袍の如くに
して短く、袖付けは後を少し縫ひたるのみに
て、前は縫はず、袖に括（ククリ）あり。地
質は古くは布を用ひたりしが、後は浮織物、
固織物、綾、平絹（ヘイケン）、紗等を用ふる
ことゝなれり、模様は一定せず。江戸時代
は、模様あるものを狩衣、模様なきものを布
衣（ホイ）として區別し、狩衣をば禮服とし
たり。〔因國〕

【前、しもざまにまくる】 狩衣の前の垂を
向へ刎ねてのばし置くべきを、膝の下に捲り
込んで敷く。

【いひがひなき者のきは】 言葉にかけてい

ふ甲斐もない下賤な分際。

【よろしき者】 身分のかなりな者。

【武部の大夫】 シキブのタイプ。式部の丞に
て五位に叙せられたるもの。〔因國〕

【前司】 前の國司。

【させしなり】 さうした。

【あめき】 わめくこと。

鑑 賞

「評釋」の評に云はく。

この條は婦人の觀察としてきはめて敏慧な特徴のあるものゝ一つである、清少は同性間よりは、む
しろ異性間の方に人望があつたらしく、そのむきの交際家であるから、自然來客が多かつたであら
う。随つて長尻のお客には、閉口しぬいたものと見える。硯の髪の毛は、當時の垂髪では、落毛の入
がちな筈で、墨の石は、さすがに文筆者の觀察である。驗者の居睡、ひどく攻撃してゐる。得勝に物
いふは、小面にくいのである。式部丞が叙爵し、駿河守が前司になる頃は、相應の老境であらう。老
人には自我的の感情が發達したり、頽廢的の氣分に陥つたりして、社會の禮法などを無視したやうな

【わらはべの、こふ殿に参りて、云云】

當時の童謡に、「こふ殿に参りて、云云」の語
があつたものであらう。子供がその俗謡をう
たふ時のやうなる身振りをしてこの醉人のするの
である。

【それはしも】 「し」は強辭。「も」は軟辭。

【心づきなし】 俗に氣にくはぬにあたる。

行動をとる者がよくある。人の家にきて、扇で塵をあふぎ立てるのは、不作法の壓巻ではあるが、昔の殿舎は、今の住宅とちがひ、掃除が不行届で、塵埃がなか／＼多かつたらうと推察される。狩衣の前を捲り入れるのは、塵を附けまいとするのだらう。出遣入の注意は、なか／＼こまかい。流石に婦人であるとはほゝゑまれる。

雪いと高く降りたるを

要旨

雪の降つた日に、中宮が侍女達に向つて、「香爐峰の雪はいかならん」と仰せられたに對して、清少の即坐に簾を高く巻上げといふ得意さを書きつけた文である。

解説

【例ならず御格子、云云】 何時になく御格子を下ろして。

【集まり侍ふに】 女房達である。此の中に清少もあつた。

【香爐峯の雪】 白氏文集十六、香爐峯下新ト山居といふ律詩に、「日高ク睡足リ猶慵レ起キニ

小閣重^{シテ}衾^ヲ不^レ怕^レ寒^ヲ、遺愛寺、鐘^ノ欲^テ枕^ヲ聽^キ香爐峰ノ雪ハ撥^レ簾^ヲ看^キ、匡廬便^ニ是^レ逃^ル名^ヲ地司馬仍^モ爲^シ送^ル老^ヲ官^ニ心泰^ク身寧^ク是^レ歸處^ニ故郷可^シ獨^リ在^ニ長安^ニとある。

【御格子あげさせて】 人である。

【御簾高くまきあげ】 清少自ら。

【笑はせ給ふ】 中宮である。

【さること】 白居易の香爐峯云々の詩句をさす。

鑑賞

「評釋」の評に云はく。

雪とさへいへば、慄へながらもめでたがつた人達が、格子をおろして話し込んでゐたのは、蓋し異例である。中宮の「香爐峯の雪は」の提唱は、格子をあげさせたく思召しての御方便だらう。

香爐峯の句は、菅公の名句、「都府樓、纔看^ニ瓦色^ヲ、觀音寺、只聽^ニ鐘聲^ヲ」の籃本として著名であり、公任もその朗詠集中に収めたほどで、當時誰知らぬ者もない。撥簾看は中宮の豫期して居られた歸結だが、只それを女房達が、どんな鹽梅に扱ふか、どんな形式で發表するかに、興味をもたれたのである。女房達の中には折角思ひ寄つても、氣の利いた御答へが出来ないので、躊躇した者もあらうが、清少の如く、何もいはずつと起つて、簾を捲上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで、終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよ／＼その敏慧さに驚かされる。清少が再三名聲を博したのは、文辭上口舌上の才鋒であつたが、これは更に一步を進めた仕打である。清少の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで、特に傳稱された所以も

そこにある。

「然るべきなめり」が、清少の才女なことを直接に保證すると同時に、「この宮の」が、中宮の才學に勝れた御方であることを、間接に保證してゐる。基俊の悦日抄に「香爐峯の雪は」を、一條院の勅言にしたのは誤解である。

○ 石山の霧に汗ばむ塗机

○ 比叡おろし式部一枚書きなほし

○ 雪のなぞ解けて御簾を捲きあげる

○ 餘の官女ただ口あいて舌をまき

二四 萬葉集の歌

要 旨

既習の古今及び新古今の歌より遙に前、奈良朝に、數多い我が國、歌集の最初のものであり又、最も歌數も多く、各階級の人の作を網羅し、然も最も傑作が多くて、千餘年後の今日に至るまでその燦たる光を失はない立派な歌集のあつた事を知らしめ、その萬葉集中、代表作家の名作を理解させる事によつて、純眞質朴な内容と表現とに盛られた我等の祖先の眞面目をうかゞひ、今後この尊い古典に親しむ動機を作らせたい。尙、歌といへば三十一文字のものと思つてゐるであらう生徒に、長歌といふものゝ形式に就ても注意させたい。

出 所

【萬葉集】 マンエンシフ。新撰萬葉集（菅原道真撰）に對して古萬葉集ともいふ。題號に就ては

一、萬の言の葉を説く説（賀茂眞淵）

二、萬世の義と説く説（鹿持雅澄）

二四 萬葉集の歌

の兩説があるが、山田孝雄氏は「萬葉集名義」に葉といふ語を言葉の意に用ひたのは金葉集以後で、萬葉集時代には支那にも日本にも、葉を言葉の意として用ひた例がない。故に萬世の義で古今の歌を集めて萬世に傳へるといふ意らしいと云つてゐる。撰者に就ても諸説がある。

- 一、橘諸兄勅撰説（榮華物語）
- 二、大伴家持私撰説（清輔、定家、契沖）
- 三、諸兄、家持兩人説（仙覺）

その他、諸兄の撰に家持の集の混じたとする説（春滿、眞淵）、家持が二度に撰したとする説（宣長）等があつていづれとも決定しがたいが、大體に於て家持が撰定の上に力を注いぞことは認められる。撰定の年代についても、古今集序に「ならの御時」とあるので平城天皇だとする説もあるが、淳仁天皇の天平寶字三年正月の歌までであるから、成立したのは畧々稱徳天皇の頃で、更に平安時代に至るまで改定を加へられて現在の形となつたものと思はれる。

その組織を見るのに、二十卷より成り、長歌二六二首短歌一七三首、旋頭歌一首、計四四九六首（古義の説による）を含んでゐる。而して大體に於て、雜歌、相聞、挽歌、譬喻歌、四季、四季相聞の六部に分れてゐる。

作歌年代の明かなものに就て見ると、仁徳天皇から淳仁天皇の天平寶字三年まで約四百五十年間に涉り、その中持統天皇から淳仁天皇の頃までの約七十年間の作が、その大多數を占めてゐる。

作者は上は、天皇、皇子より下は、樵夫、海士に及んでゐるが、中でも柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴家持、笠金村、高市黒人、高橋虫麻呂、大伴坂上郎女、額田王、茅上郎女、笠郎女等が特に名高い。その他、卷十四の東歌、卷十三の歌、卷二十の防人の歌等作者も分らないやうな民衆の歌にすぐれたものが多い事は注意すべきである。而してその書式には、漢字の音訓を用ひ、所謂萬葉假名を以てしそれには正音、略音、正訓、義訓、畧訓、約訓、傍訓、戲訓の八種の用法が行はれてゐる。従つて後世これを訓む事が研究せられ、天曆五年には梨壺の五人（坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔）によつて古點が行はれ、更に平安朝末に、大江佐國、藤原孝言、大江匡房、源師頼、藤原基俊等により次點が施され、鎌倉時代に至つて仙覺が新點を加へた。然しいまだにその訓み方の不明なものがある。

萬葉集の註釋書及び研究書は頗る多い。左に有名なものを擧げておく。

一、全釋書

- 萬葉拾穗抄 三十冊 北村季吟
- 萬葉代匠記 五十四冊 契沖

萬葉集略解 三十冊

加藤千蔭

同 古義 九十五冊

鹿持雅澄

同 新考 三十三冊

井上通泰

同 新講 一冊

次田潤

二、抄釋書

萬葉集註釋 十冊

仙覺

同 玉の小琴 二冊

本居宣長

同 選擇 一冊

佐々木信綱

萬葉集の鑑賞及其批評 一冊

島木赤彦

三、研究書

萬葉集の新研究 一冊

久松潜一

近江の荒都を過ぐる時

作者

【柿本人麿】 カキノモトノヒトマロ。萬葉中期藤原朝を代表する歌人で後世歌聖と稱せられてゐるけれども、その傳記に就ては史上に見えないので確に知るよしが無い。萬葉に見える歌によつて僅に推

定するのに、年代の明にわかつてゐる最初の歌、日並皇子尊殯宮之時（卷二、挽歌）に作つたもので、この時人麿二十四、五歳かと思はれる。然らば生れたのは天智の四、五年頃か。而して持統、文武兩朝に仕へ駕に從うて紀伊、伊勢、吉野等に赴き或は輕皇子や長皇子の御供をして狩獵に行つたり、又近江の荒都を訪ひ、筑紫にゆき、晩年には石見國に赴任してその地に歿した。然しその役人としての地位も、守ならば紀か續紀に見えてゐる筈であるが、それもないところをみると、介か目などの程度であつたのであらう。又位も六位以下であつたらしい。それは三位以上は薨、四位五位は卒、六位以下庶人は死と記すのが普通であるが人麿の歿した時妻の依羅娘子の作つた歌（卷二、挽歌）の題詞に「柿本朝臣人麿、死時云々」とあるからである。尙この歌は但馬皇女薨去の時和銅元年の歌と、和銅四年歲次辛亥河邊宮人姫島松原見孃子屍悲歎作歌二首と題する歌との中間に出てゐるかから人麿の歿したのは和銅二、三年頃で、「畧解」に「藤原宮和銅の始奈良へ遷都より前にみまかられしなり」と云つてゐるのは大體當を得てゐる。時に年五十歳足らずであつたらしい。彼の歌に老を歎いたものが見られない事も、長命でなかつた一證左となると思ふ。謠曲拾葉抄に四十二で歿したと云つてゐるのは、割合眞實に近いらしい。然し普通には林春齋の本通朝鑑の神龜元年三月歿といふ説が傳へられてゐる。が勿論根據のないものである。諸所に柿本神社又は柿本寺と稱するものがあつて、それ／＼出生地、墓所と云ひ傳へてゐるがいづれが正しいともいへない。とにかく大和に生れ、石見で

死んだが、大和に葬つたのではないかと思はれる。集中人麿作として載せられた歌の数は、長歌十六首、短歌六十餘首、その外に人麿歌集に出づと註したものが、長歌、短歌、旋頭歌合せて三百餘首ある。然し後者は彼の作か否か疑はしい。

解 釋

【近江の荒都】 天智天皇紀に「六年三月辛酉朔己卯遷都于近江」と出てゐる。この事に就て次田氏の萬葉集新講に次の如く述べてゐる。「(上略)天智天皇は大なる抱負を抱かせられてゐたやうであるから、或は豪族の多い飛鳥の地をお避けになる爲であるか、或は三韓や唐の船の出入する難波津に便利な地に都せられる必要があつたのか、或はまた東國に對する政策の爲であつたのか、兎に角思ひ切つて遠く、大津の遷都を御實行になつたのである。大津は單に湖上の要津といふだけでな

く、東北二道の咽喉で、兼ねて水陸の要路であつたので、當時帝都として好位置であつたのであらう。(中略)。かくて天皇は十年十二月に崩御になり、その後は壬申の亂を見るやうになつて、亂後大海人皇子はまたもとの飛鳥にお歸りになつて、淨御原に都をお定めになつたのである。大津宮の位置に就ては喜田博士の説に「大津宮の位置は今の大津市ではなくて、これより遠く北の方幸崎に近い滋賀村なる滋賀里の地であつた。是は天皇が都を此に定められた翌年に、宮城の西北の山に崇

福寺を營んだといふ記事から推定する事が出来る。崇福寺は大津京荒廢の後も猶ほ久しく保存されて、恐らくは平安朝の末頃までも儼然として維持されたものの様に思はれる。今も猶ほその礎石の一部は完全に保存されて、最近に碑を立て、其の場所を表彰する事となつた。」(「帝都」より)とある。さてこの歌

は都が再び飛鳥に復せられてから、十數年を経た後、多情多恨の人麿が、壬申の亂後全く荒廢に歸した宮城の跡を見て、無量の感慨に打たれて歌つたものである。

【玉だすき】 畝火、かく(懸く)等にかゝる枕詞。玉は禪の美稱と思はれるが、「古義」には玉と書いてあるのは借字で把禪の意であらう。畝火にかゝるのは、把禪頸根結といふ義

からであらうと云つてゐる。又冠辭考には、禪を嬰ると續くのであらうと説いてゐる。

【畝火の山】 大和三山の一。

【樞原のひじりの御代】 神武天皇の御代をいふ。「ひじり」は原文「日知」とあつて、

〔略解〕。「古義」等に「天つ日つき知ろしめす御孫の命を日知と申し奉れり」と云つてゐる。即ち日嗣知の意であつて、聖代の意に解するやうになつたのは仁徳天皇の時である。

【ゆ】 原文「從」。「より」の意。萬葉時代には「より」と同じ助詞に「ゆ」「ゆり」「よ」「より」の四つがあつたが、「ゆ」はまた「を」「に」「へ」等の意に用ひられる事もある、

【生れましし】 アれましし。生れ給ひしの意。「古義」に「阿禮てふ言の意は、新、現と

通へり。生るるは此の身の新に成なり。又現るゝなればなり。」と云つてゐる。

【神のごとこと】 歴代の天皇をいふ。上代では御皇を現つ神として尊崇したのである。【新講】。

【樛の木】 ツガのキノ。ツガの音からツギに云ひかけて、「つぎつき」の枕詞とした。「樛」は「梅」とも書きトガともいふ。【百科】に次の如く云つてゐる。「松柏科の常緑喬木。我國の中部南部に産し、支那にも分布す。幹は高さ十丈、直径三尺に及ぶ。樹皮は帯緑濃褐色又は灰色にして龜裂す。枝は太くして不規則に廣張し、末は下垂し小枝及び葉を密生し、扁平圓錐形の樹冠をなす。葉は線状にして上部は廣く凹頂をなし、扁平にして長さ五

分、幅一分ばかり。上面は深綠色にして下面に二條の白線あり。柔軟にして人を刺さず。穂果は頂生にて長さ六、七分卵圓形にして鈍頂をなし、長さ三、四分ばかりの柄あり云々。】

【いやつきつきに】 「御代御代御位をつがせ給ひしを云【古義】。「イヤツギニの下にヤマトニテコソといふことを省きたり。そは下なるヤマトヲオキテに譲れるなり。【新考】。

【しろしめしを】 原文「所知食之乎」とあつて傍法に「或云」として「食來」とあるをとつて略解には「シロシメシケルの方まされり」と云つてゐる。「しろしめしを」の「を」は「ものを」の意である。美夫君志に此の乎の辭いと力あり。下の倭乎置而云々平山乎越

云々とあると三つの乎は思ひの外の事せさせ給ひしにおどろける意を示せるものなり。かゝる調べは此の朝臣ならではなし得まじきものなり。(略)この乎は下の何方御念倉可にかゝれり」と記してゐる。

【空に見つ】 原文「天爾滿」「或云」として「虚見」とある。【古義】、【略解】、などこの方を探つて「ソラミツ」と訓んでゐる。大和にかゝる枕詞である。【新講】に「さて」「そらみつ」の語義に就ては、從來日本書紀の饒速日命が天の磐船に乗つて空を翔けて居たとき大和の國土を見下ろして、山河の美しい地として、天降りなされたといふ神話によつて、天から見た大和の意で懸けるのであると解釋されてゐたが、(契沖、眞淵)此の神話は寧ろ

この枕詞から生じた、一種の説明神話であるやうに思はれるから、この枕詞の起源と云ふことは出来ない。それよりも守部がソソリ滿ツ山の意で、大和は青山四周の地であるから、その地形から云ひかけたのであると云つてゐるのは参考になる。此の外同じく地形から見て、空滿つ山戸の義に解く説もある。」と述べてゐる。

【大和をあきて】 大和を捨ておいて。

【青丹よし】 アヲニよし。奈良の枕詞。「よし」は「よ」と「し」と二つの助詞で、「よ」は呼びかけていひ、「し」は指示する意を添へるのであるが、青丹について種々の説がある。從來重きを置かれてゐる説は、昔奈良山から繪具の青丹を産したので、生物を以て枕

詞としてたのであるといふ説であるが、長井金風氏は楯の果實は青くて玉のやうであるから「青瓊」と云つたのであると云つてゐる。

〔新講〕

【なら山を越え】 原文「平山乎越」「或云」として「平山越而」とあり、「古義」、「略解」等はこれに従つてゐる。「新講」に「奈良山は春日山から西北に連る一體の小高い山をいふので、今の郡山街道即ち歌姫越が昔の奈良山越であつた。」と云つてゐる。

【いかさま おもほしめせか】 いかさまにおぼしめせばか、即ちどういふ風に思し召したのかの意。下の「天の下しろしめしけむ」に係る。「美夫君志」に次の如く云つてゐる。「遷都をおぼしめしたたせ給ひける敬慮のほ

どを量りがたくあやしみたるなり。さるは御代御代の天皇たちの、しろしめしたりし倭を置きて鄙の淡海には何故にか都を遷させ給ひしとの意なり。此所一首の眼目なり。」原文「何方御念食可」「或云」として「所念計米可」となつてをり、「略解」、「古義」はこれによつてゐる。

【天ぞかる】 鄙の枕詞。「冠辭考」に「都かたよりひなの國をのぞめば、天と共に遠放りて見ゆるよしにて、天離るとは冠らせたり。さかるとは、こゝより避り離れて遠きを云」といひ、「古義」では、高橋正元の説として「こは高光、天傳、天照などいへるたぐひにて、天に離る日といふ意にて、此の一言にいひかけしのみ云々」を擧げてこれを採つてゐる。

【鄙にはあれど】

〔古義〕に「大神景井考にこゝは夷者雖不有とありしが、不の字を脱せるなるべしと云るは、實にいはれたる事なり」と云つて「不」の字を補ひ、ヒナニハラネドと訓んでゐるが、餘り考へすぎて穩當を缺いてゐる。鄙とは田舎の意で大津を指した。田舎ではあるが都として適當な地と思召しての意。

【うはばしの】 石橋にて、近江の枕詞。淺瀬に石を置き竝べて渡るものにて、石橋の間といふを「あふみ」にいひかけた也。「美夫君志」(冠辭考の説と同じ)。

【いづ波の】 「略解」等は大津、志賀等にかゝる枕詞としてゐるけれど、卷一、高市黒人の歌、「さざなみの國つ御神の云々」等の如く續

く場合も集中に見られるから、「美夫君志」、「新考」等の説の様に、廣い地名であつて、大津も志賀もその中に含れてゐたと見るのが妥當であらう。

【大津宮】 諸古本の朱書に云、「志賀、郡大津是也大津宮といふこと日本書紀には見えざれども續紀の慶雲四年七月の詔に、近江大津宮御宇大倭根子天皇云々」とあり。「美夫君志」【天の下しろしめしけむ】 いかさまにおもほしめせかの結にて上なるアメノシタシロシメシヲと呼應せり。此の二句なるスメロギノカミノミコトノと辭は切れ、意はつゞけり。俗語にて釋くにはソノといふ語を加へて釋くべし。「新考」即ちどういふ風に御思ひになつて大津の宮に天の下を治しめしたので

あらうかの意。

【すめらぎ】 スメロギ、スベラギとも稱す。

天下を統べ治める君の意で天皇の御事をいふ。こゝでは天智天皇を申す。

【神のみこと】 天皇を尊んで云つた詞。みこと（命、尊）は尊稱である。

【大宮、大殿】 大は尊稱。古義に「上に宮といひ、こゝに殿と云るはいひかへたるなり。

かく同じやうの事を二句いひかへてよめる事古歌に多し。此は事を懇にいはむとする時のわざなり」と云つてゐるのに對し、「略解」、【新考】等は辭の文に云つたのみであると説いてゐる。

【春草の茂く生ひたる、霞立つ春日のされる】 原文「春草之、芝生有、霞立、春日

之霧流」、或云「霞立、春日香霧流、夏草香、繁成奴留となつてゐる。【略解】は「今本春草之、春日之とある二つの之の字は歟の字の誤れるか、こゝは之の詞にてはかなはず」と云つて或云の方をまさつてゐるとしてゐる。又【新考】でも、この二つの之は可の誤でないかと云つてゐるが、これ等の説は春草が生ひ繁つてゐる爲に見えぬのか、春の日が霞んでゐるために見えぬのかといふやうにこの語を解してゐるからである。然しこゝでは【新講】の説のやうに、大宮所にかゝる修飾句と見た方が自然である。従つて之は問題にならない。「霞立つ」は春の枕詞。「霧れる」は「霞める」に同じ。

【百敷の】 モモンキの。宮の枕詞。「多くの岩

に、既に廢墟となつてゐたものと見るべきである。【新講】

【悲しも】 「も」は感動詞。

一首の大意は、畝火山の近くの樞原の宮で、天下をお治めになつた神武天皇の御代以來、お生れ遊した歴代の天皇は、つきつきに大和の國を都として政治を御覽になつてゐたのに、どう思召したのか、我々の様な者にはわからないが、その大和を捨て、奈良山を越え、遠い田舎ではあるけれども近江の大江を適當な所として都をこゝにお定めになつて、天下をお治め遊した天皇の大宮は、こゝだと聞いてゐるが、大殿はこゝだと人も語るけれど、あたりには春草が生ひ茂り、一面に霞がかゝつてゐて其の跡さへもわからないこの大

を以て堅固に築き上げた大宮といふ意である。喜田博士の説に、「八」は必ずしも八ツでなく、澤山と云ふ意であつて、ヤシキ（屋敷）といふのは、宮殿の周りに多くの石をめぐらしたものをいふのであるが、それが普通の人民の家に濫用されるやうになつてから、天皇の御所は更に大きく、モモンキ（百敷）の大宮と云つたのであると（尾參遠郷土史論）。

【新講】。

【大宮所】 大宮の跡なり。【新考】當時宮殿が現存してゐたと見る説があるけれども、歴史家の説では遷都後間もなく大藏省が焼け、十年にも再び大藏省が炎上して、遂に宮城も烏有に歸し、天皇はその翌月崩御遊ばされたのであるといふ事であるから、壬申の亂の前

宮處を見ると、悲しさに堪へられない氣持がする。次田氏は「新講」にこの歌を評して次の如く云つてゐる。

萬葉集に挽歌（哀傷の歌）の多いこと、皇室をたゞへ、帝都を讚し、古京を悲しむ作の多い事は、特色として著しく目立つことである。これは何に基くか、それには種々の理由もあらうが、當時の國民思想が一般に、著しく現實主義であつて、生を愛し現世を樂しむといふ念が特に強かつたために、彼等にとつては、衰亡とか死滅とかいふことが人生の最大の悲哀として、深く情緒を動かしたに相違ない。これが挽歌の特に多い理由であらうと思ふ。次に皇室又は帝都に關する作の多いのは、當時の國民が、天皇は神にましますと

いふ信念に基いて、皇室をこの世に於て最も尊嚴なるものとし、最大の尊敬を拂つて仕へてゐたからであつて、古京に對して感慨の涙を濺いでゐるのは、大なるもの盛なるもの衰亡に對する哀愁から起るのであつて、これは現實主義と皇室尊敬の至情とからまつて、起り來るものの様に思はれる。而してこれ等の思想を最もよく代表した歌人は、人麿であつたやうである。即ち人麿は元來多感の歌人であつたから、叙景よりも抒情が得意であつた。又抒情の中でも挽歌が最も多く（特に皇族の崩去を哀悼した作が多い。）又皇室や皇居や古京に關する作も随分多い。さういふ特色から見ると、この長歌の如きは、人麿の代表的作物の一と謂つてよいと思ふ。即ち英邁な

る天智天皇の偉業は、崩御と共に中絶し、絶大の抱負を抱かせられて御經營になつた帝都は、僅か四年にして、皇室至大の亂後忽ち廢墟となつて、琵琶湖畔の春草茂き所に、只礎を留めるのみであると云ふやうな、悲哀な光景に對しては懷古の情に堪へず、又偉大なるものの推移興亡に對する無量の感慨が起つて、一氣に詠んだのがこの歌である。さう思つてこの作を読むと、「大宮はこゝと聞けども」以下の句調の如きは、よく彼の情緒の高調に達したことを示してゐて、誦む者の心を大に動かすものがあるやうに思ふ。

【反歌】 ハンカ。カヘシ歌或はミジカ歌と讀む説もあるが、ハンカとよむ事に就て「美夫君志」別記に反歌の説として詳しく説かれて

ゐる。即ち、荀子卷十八賦篇に「天下不_レ治請_レ陳_ニ倦詩云々、與_レ愚_ニ以_レ疑、願_ハ聞_ニ反辭_ヲ」とあつて揚_レ驚、註に「反辭、反覆叙說之辭、猶_ニ楚詞、亂曰_一といひ、又同書に「其小歌曰云々」とある註に「此_ノ下、一章即其反辭_{ナリ}、故謂_ニ之_ヲ小歌_ト、摠_ニ論_{スル}前意_ト也とあり我國の長歌は彼の國賦の様なものであるから、反歌は全くこの反辭を擬したものであつて、一篇の末に其大意を總括し、又いひもらした事を短くつゞめてよみそへたのである。よつて其の讀みも字音でハンカとよむべきである。又長歌についてゐる反歌を或は短歌ともいふ事のあるのは、短歌は三十一言の歌の總稱であるから長歌の奥のもこの中に合れるのであつて、反歌は専ら長歌の奥の短歌の場合

に限る稱であるといふのである。

反歌は必ずしも長歌一首に對して一首と定つてゐない。二首三首、或はもつと多數の場合もある。この「玉だすき……」の長歌の反歌も次の「さよなみの云云」の外に「さよ波の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」の一首をも伴つてゐる。

【志賀の辛崎】 八景の一の辛崎である。このあたりは都のあつた頃は湖上交通の要津であつた。

【まさくあれど】 「幸く」である。恙なくの意。「辛崎はさきくてその御代のまゝにてあれどもといふなり。かの御世に宮人の舟遊つねにせし所なればいふなるべし」〔古義〕。

【まぢかねつ】 俗にいふ待かねる意ではな

い。「マチカネツとはまでも待得ざるをいふ。カネは集中に多く不得とかけり、しかあらむと心にねがふことのつひにその本意を得ざるをいふ。〔古義〕。辛崎を擬人化したのである。

一首の意は、大宮人が常に舟遊びした志賀の辛崎は、昔ながら變らずにあるけれども、大宮人の船を待ち受ける事は出来なくなつてしまつた。

短歌四首

作者

【山部赤人】 ヤマベノアカヒト。本書第八課の條参照。

「わかのうらに、の歌」卷六、雜歌

神龜元年甲子冬十月五日幸千紀伊國時山部

宿禰赤人作歌一首并短歌と題して次の長歌と

反歌一首と共に出てゐる。(即ちこの長歌の反歌である。)

やすみしし我で大君の外宮と仕へ奉れるさ
かひ野ゆそがひに見ゆる沖つ島清き渚に風
吹けば白浪騒ぎ潮干れば玉藻刈りつつ神代
より然ぞ尊き玉津島山。

反歌

沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちい隠ひなば思ほ
えむかも。(有明堂文庫本の訓に従ふ)

長歌の大意は「わが大君の離宮として、吾々がお仕へ申してゐる雜賀野から、うしろの方に見える沖つ島の清い渚には風が吹くと眞白い浪が寄せては碎け、潮が干ると海人が出て美しい藻を刈る。遠き神代以來このやうに尊

い所である。この玉津島は。(新講による)

反歌の方は「今は潮が干てゐて沖つ島の荒磯に、美しい藻が見られるが、その中に潮が満ちて来て、隠れてしまつたら惜しい事である。神龜元年は聖武帝の元年に當る。

【かたをなみ】 「み」は接頭語で形容詞の語根につく。「ために」故に」の意を持つ。「かたをなみ」は干潟がない故にの意。今和歌の浦に、名所として「片男波」といふ所があるが、後世この歌から附會したのである。

一首の意は、和歌の浦に潮が満ちて来ると、おり立つべき干潟がなくなるから、葦の生えてゐるあたりをさして、鶴が鳴いてゆく。

(評) これは集中の透逸の一である。潮が満ちて来て白い洲がだん／＼無くなると、渚に

遊んでゐた白い鶴の一群がさつと飛んで、青い葦原をさして移りゆくといふ清く快い景色が、あり／＼と眼前に動くやうである。赤人の客観的なこの歌と、人鷹の主観的な「近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに古思ほゆ」の歌とを比較して、二大歌聖の特色を知る事が出来る。「新講」。

【うばたまの、の歌】 卷六、雑歌

この歌は、神龜二年乙丑夏五月芳野離宮に御幸の時從駕した赤人の作つた長歌

やすみししわご大君の高知らす芳野の宮は
たたなづく青垣ごもり川並の清き河内ぞ春
べは花咲きををり秋されば霧立ち渡る其の
山の彌益々にこの川の絶ゆる事なくももし
きの大宮人はとはに通はむ。

(大意) わが大君が皇居として御住になつてゐるこの芳野の離宮は、重りあつて青い垣をめぐらしたやうな山脈にとりかこまれ、清い川の流に包まれたところである。そして春になると花が咲き満ち、秋になると霧が一面に立ちこめる。その山の様にいよ／＼盛んに、この川の様子に絶えることなく、大宮人等は永久にこの宮に通ふであらう。この宮も永久に榮えられる事であらう。

み吉野の象山の間の木ぬれには幾許も騒ぐ鳥の聲かも

(大意、吉野の象山の間の梢には、數知れぬ多くの小鳥が鳴き騒いでゐることだ)

【うばたまの】 原文「烏玉之」とあり、大低

の本ではヌバタマノと訓んでゐる。「古義」の品物解卷之四に「日本紀私記に、師説烏扇之實也、其色黒々、以喩之と見えたるが如し。

烏扇は、和名抄に、射干、一名烏扇、和名加良須安布木とあり。故し集中に射干玉と書き又野干、夜干など書るは音を借れるなり。又烏玉、黒玉など書るはその實の黒き故に書るなり。さて名の意、本居氏云、或人の説に烏扇の葉は羽に似たる故に、此草を野羽と名づけ、其實を野羽玉とは云りと云るぞよろしき。烏扇といひ今俗に楡扇といふも葉の羽に似たるよしなり。」と解いてゐる。即ち元はこの様に黒にかゝる枕詞であつたのが、轉じて髪、夜、夢、月等にもかゝるやうになつた。

【夜のふけぬれば】 原文「夜乃深去者」舊

訓ではヨノフケユケバと訓み、「略解」、「新講」、有明堂文庫本などこれに従つてゐる。「古義」、「新考」は教科書と同訓である。

【ひさ木】 和漢三才圖會卷八十三、喬木の條

に「楸、即梓之木、赤者也。有行列、莖幹直聲可可愛至上垂、條、如線、謂之、楸線、(中略)其葉大而早晚、故謂之、楸。豐政全書云、楸山谷中多有之、甚高大、其木可作琴瑟、葉類梧桐、葉而薄、小、葉、梢、作三角尖叉、開白花、味甘。」(「新講」)には、「ひさ木(楸)は荒れた山地に溪流のほとり若しくは野火の燒跡等に、殆ど雜草同様に自生する落葉喬木で幹の高さは普通五六尺で、時には二丈位に達する。葉は對生し、形は桐の著に似てゐて長

い葉柄である。嫩葉と葉柄は共に美しい紅色を帯びてゐるので、アカメガシハ、アカメギリ等と呼ばれる。花は夏開き雌雄同株で、花は五六寸の穂状をなし、雌花には花瓣がない。」と解いてをるけれど、他にも「木ササゲ」と説く説（略解等）「クヌギ」と解する説などもあつて、分明してゐない。

【しば鳴く】 原文「數鳴」とある如く、しばしば鳴く、しきりに、鳴くの意。

一首の意、夜がだんだん更けてゆくと、楸の生えてゐる清い川原に、千鳥がしきりに鳴いてゐる。

島木赤彦氏はその著「歌道小見」にこの歌の前の反歌即ち、「みよし野の……」と、人麿の「あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が

岳に雲たちわたる」の歌とを比較して、「人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つてをります。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した静肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝに異つてゐるのであります。それが自然に歌の調子に現れるのであります。人麿の歌は、數歩を過まれば、騒がしくなりませう。赤人の歌は、數歩を過まれば平板になりませう。（下略）」といひ、萬葉集の鑑賞及び其批評（同氏著）に、この「ぬば玉の……」の歌をあげて、「靜肅な感動を、その感動の現れが前の歌（みよし野の歌）に通じてゐる所がある。矢張赤人の傑作

首。

【すみれ摘みにと】 莖つむは衣摺らん料なるべし〔畧解〕。

一首の意は、莖をつみにと來たのであるが、春の野の景色のおもしろさに、歸るのが惜しくて、一夜をそこで明かしたことである。

萬葉集の鑑賞及び其の批評に、この歌を評して「細かくて張つてをり、細かい所から滋味が泌み出てゐる。それが赤人調の一特徴である。（中略）歌柄は少し外延的である」と云つてゐる。

【田兒の浦ゆ、の歌】 卷三、雜歌

山邊宿禰赤人望三不盡山一歌と題する長歌の反歌である。その長歌は、本書の「八、當嶽の詩神を懷ふ」の條を参照されたい。

であらう。（中略）第一句より三句まで押して

ゆく勢が既に異常であつて、一種澄み入つた世界へ誘ひ入れられる心地がする。それを第三句より第五句まで連続した句法で受けて、最後に「千鳥しば鳴く」といふ引き緊まつた音で結んでゐる。暢達の姿があつて軽い滑りにならない。一首各音の持つ響きが度ましく緊まつてゐることが、更に一首の感じに大きな影響を與へてゐる。（略）猶この歌夜半の暮情を歌ひながら「久木生ふる清き川原」と明瞭に直觀的に歌つてゐるのは、月光の明かな夜でもあつたのか。そこに少しの疑がある。（下畧）。と評してゐる。

【春の野に、の歌】 卷八、春雜歌

山邊宿禰赤人歌四首と題する短歌の中の一

【田兒の浦ゆ打ち出でて見れば】「打ち」は接頭語。この二句の解に種々あつて、眞淵は「打出て田兒の浦より見ればと心得べし」といひ、「古義」には「田兒の浦より、沖の方へといふ意なり」とし、「略解」には田兒の浦より東へうち出でて見ればといふ意にかくは詠めり」と解いてゐるが、尙、「槻落葉」、「檜抓午」の「於田兒之浦」とする説がよい。即ち「田兒の浦に」の意とするのである。

【雪は降りける】フレリケルにてフツテラルといふ事なり。新古今集、百人一首などにフリツツに改めたるは今ふることに思ひたがへたるなり。「新考」

一首の意は、田兒の浦に出て見ると、青空にそびえてゐる富士の高嶺に、雪が眞白に降り

積つてゐるのが見える。「新講」。

評、萬葉集の鑑賞及び其批評に「何等の奇なき所が、この歌の大柄にして富士の大きな姿を現し得てゐる所以である」といひ、契沖は古今の絶唱と嘆稱してゐる。

子等を思ふ歌

作者

【山上憶良】 ヤマノヘノオクラ。藤原朝から奈良朝へかけての歌人、齋明天皇の六年に生れたが壯年時代の事は傳つてゐない。文武天皇の大寶元年正月に、粟田真人が遣唐大使として入唐するとき、憶良は四十二で遣唐少録となつて唐に渡り、三年半許りたつて、慶雲元年七月に歸朝した。その後元正天皇の靈龜二年に伯耆守となり、養老五年には東宮の侍

等思云々（代匠記）に最勝王經に據つたといつてゐる。

羅睺羅（釋尊の嫡子）。

至極大聖（釋尊のこと）。

この歌は「萬葉考」に「都にとどめたる子を筑前の國にておもふなり」と云つてゐる。

【瓜食めば云々】「代匠記」に、陶淵明の責（子詩）「通子（ハナタマ）垂（タラシ）九齡（九歳）、但覺（但し）梨與栗（梨と栗）をひいてゐるのに對し、「新考」に「げに此詩によりて梨を瓜にかへたるなり」と云つてゐる。

【思ほゆ】 思は被（ユ）の轉。思はる。自ら心に思ひ得。（言海）「ゆ」は「る」の古語。

【忍ばゆ】 シヌばゆ。原文「斯農波由」代匠記はシノバユと訓んでゐる。

【何處より來りしものぞ】「代匠記」に「宿

解

釋

候となり、晩年には大伴旅人の下官として筑前守となり、僻鄙の地に數年を送る間に妻子に先立たれ、聖武天皇の天平五年六月七十四歳で歿した。歌の才に於ては人麿に次ぐべく、赤人よりは寧ろ上にあるものと云はれてゐる。（次田氏著萬葉集新講にある）。

思子等歌一首并序と題してあつて、次の序が附いてゐる。

釋迦如來（コシキ）、金口（コシキ）、正説（コシキ）、等（コシキ）、思（コシキ）、衆生（コシキ）一如（コシキ）、羅（コシキ）、睺（コシキ）。又説（コシキ）、愛（コシキ）、無（コシキ）、過（コシキ）、子（コシキ）。至極（コシキ）、大聖（コシキ）、尙有（コシキ）、愛（コシキ）、子（コシキ）之（コシキ）心（コシキ）。況乎（コシキ）、世間（コシキ）、蒼生（コシキ）、誰（コシキ）、不（コシキ）、愛（コシキ）、子（コシキ）乎（コシキ）。

註、金口（コシキ）釋迦如來は金身なれば金口といへり。「略解」。金口の正説は即ち直説なり。「新考」。

世の因縁に依て親となり、子となるとは聞けど、宿命知るなければ知られぬ故なり。又故郷に留めたる子どもの夢に見え、面影に立を云歟」と云ひ、「略解」に「如何なる過去の因縁にて吾子と生れし物ぞとなり」とこの説を受けてゐる。

【まなかひ】 眼之間にて、常に目前に在る如く思ふ意か。「略解」

【もとな】 集中に割合多く使はれてゐる語であるが、適當な解釋のしにくい語で、時には徒らに、よしもない等の意に解するのがよい時もあるが、こゝでは「むやみに」とか「仕様もなく」「すべもなく」等と解したらよからうか。

【やすいしなさぬ】 「やすい」は安眠。「し

は助詞。「なさぬ」の「なさ」の原形は「なす」で「寝」に副語尾の「す」を添へたのである。古くは寝ることを「寝をぬる」といひ、その反対を「いもねず」といつたのである。さて「す」は敬語法の副語尾であるが、こゝは單に寝られぬといふ意に見てよい。「新講」又「新考」には、「ナサヌはナスのはたらけるにてネシメヌなり」と云つてゐる。「新考」の説が正しいか。

一首の意は、瓜を食べると、この瓜を食べさせたらと思つて先づ子供の事が思ひ出され、栗を食べるとまして子供の事が思ひやられる。一體子供といものは、どういふ因縁で吾々のところへ生れて來たのであらうか。かうして離れてゐると、むやみに目の前にその姿

なり。古義にナニ故ニと譯せるは當らず。

【新考】

【子にしかめやも】 しかめやは反語。「も」は感動の助詞。

一首の意は、銀も金も玉も何のために寶としよう、子にまさる寶が世にあらうか。

萬葉集の鑑賞と其批評に次の如く評してゐる。「有名な歌であるが、有名なほどの良い歌ではない。矢張り觀念的な表現に終つてゐる。只全體の調子に一貫せる所あるゆゑ、多少の命を持つてゐる。」

天皇内大臣藤原朝臣に詔し

て春山葉花の艶、秋山千葉

の彩を競憐せしめ給ふ時

額田王歌を以て之を判ずる

がちらつて、中々吾々に安眠もさせない。

評、濇い情の人としての憶良の面目を示してゐる作である。卒直にして古拙ともいふべき歌ひ振りは彼の特色とする所である。「新講」

【黄金】 原文「金」「古義」に、卷十八「賀陸奥國出金詔書歌」に久我禰と假名書されてゐるのを證として、クガネと訓み、「新考」、「新講」等この訓に従つてゐる。

【なにせむに】 ナニセムニはナニセムといふとは異にて何ノ爲ニ、イカニセム爲ニなどいふ意なり。例は卷四にコヒシナム、ソレモオナジゾ、奈何爲二人目ヒトゴト、コチタシワガセム。又卷十六に、何爲牟爾ワヲメスラメヤとあり。此等の例によれば、今の歌は第三句の下にタカヲトセムなどいふ辭を省きたる

歌

作者

【額田王】 ヌカタノオホキミ。萬葉前期に於ける有数の女流歌人。玉かつま、二の卷「鏡女王額田王」の條に「古は女王をも分て某、女王とは云はず、男王と同じく唯某、王といへり。かくて萬葉の頃にいたりては、女王をば皆女王と記せるに此の額田王に女の字の無きは、古きものに記せしまゝに記せるなるべし。鏡、女王は父の名とまぎるゝ故に古くも女王と記せるなるべし。さて右の二女王、ともに鏡、王と云ひし人の女にて、鏡、女王は姉額田王は弟と聞えたり云々」といひ、古義、一之卷上に「姉の鏡、女王は大和國平群郡額田郷に住居はれし趣、二の卷に見えられたれば、

この女王も姉に従ひ給ひて、額田郷に居られし故に、やがて名にも負せられたるなるべし」と云つてゐる。この二人の姉妹は共に天智天皇に娶れたが、それは卷二の天皇と鏡、女王との贈答の歌、卷四の額田王の思、近江天皇歌、次の鏡女王の歌等で知られるところである。然し額田王は天皇に娶れる前に、ひそかに皇太子大海人皇子（天皇の御弟、後の天武帝）に召されて、十市皇女（天智天皇の御子大友、皇子の妃となつて、葛野王を生む）を生んで居られ（天武紀に、天皇初娶、鏡女王額田姫王、生、十市皇女」と云てゐる）、天皇に召されて後も皇太子が心をかけて居られた事が、卷一の天皇遊、獵蒲生野、時額田王作歌「あかぬさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君

が袖ふる」皇太子答御歌「むらさきのにほへる妹をにくゝあらば人づまゆゑに吾れ戀ひめやも」の贈答の御歌にわかる。それで天智天皇崩御後は、更にめされて天武天皇に御仕へした。

解 釋

題詞は原文「天皇詔、内大臣藤原朝臣、競、憐春山萬花之艶秋山千葉之彩、時額田王以、歌判之歌」

【天皇】 天智天皇。

【内大臣藤原朝臣】 藤原鎌足。但し鎌足は

天智天皇八年十月に大臣の位と藤原氏とを賜ひ、天武天皇三年に朝臣の姓を賜つたのであつて、この時にはまだ内臣中臣連であつた筈で、後から尊んでその極官を記したのだと諸

本に云つてゐる。尙古義には、内大臣はウチノオホマヘツキミと訓べしと云つてゐる。

【春山萬花の艶云々】 春の色々の花と秋の美しい紅葉と何れが勝つてゐるか、群臣に御下問のあつた時、額田王は歌を以て春秋の優劣を判断した歌。判は、「美夫君志」、「新考」等に云つてゐる様に、人々の議論を判じたのでなく、春秋の優劣を判じたのである。

【冬ごもり】 冬は萬の物内に籠て春を待てよりに出づるより此言はあり。「萬葉考」

【春さり來れば】 教科書に「來れば」とある「ば」は「ば」の誤。原文「春去來者」。春になるとの意。「新講」に「サリクレバはシアリクレバの約音で、シは指示する意味の助詞である。

【鳥も來なきぬ】「新考」に「辭は切れ意は下へつづけり。キナキといふに意は同じ。ヌを省きて心得べし」といひ、「新講」には「ぬ」は完了の助詞であるが、こゝは調の上から軽く添へたまでである」と云つてゐる。

【咲けれど】「れ」は過去の助動詞「り」の已然形。

【山をしみ】山が茂つてゐる故にと云ふ意である。シモト（「楚樹」を宛ててある。叢の意）。シミサブ（茂り榮える意）、シミミ露などの茂くおくさま）などがあり、一方にシミと同じ系統の語と思はれるものに、「染む」「締む」「占む」（何れも集中する意がある）等がある。此等を見るとシは「の古い用言の語根であつて、それに接尾語の「み」（形容詞の語

幹について副詞を作る）が添うて、シミといふ語が出来たのであらう。「新講」。

【入りても取らず】「古義」、「新考」では原文「入而毛不取」の「取」は「聽」の誤字であるとしてキカズと訓み、上の鳥も來鳴きぬといふ句に對せしめてゐるが、如何。

【秋山の】この句の上に、これに反してといふ語を補つて見ると明日になる。

【もみぢをば】原文「黄葉乎婆」。「新考」に、「考以下モミヅとよめり。されどモミヂタルヲバ（或はモミデルヲバ）といふことをモミヅヲバと云ひては辭足らず。案ずるにもみぢたるものは即モミヂなれば舊訓に従ひてモミヂヲバと訓むべし。元來モミヂタルモノといふことにて、木葉といふ意は無し。前註者モミヂ

んでゐる。

【秋山ぞわれは】原文「秋山吾者」。眞淵は「曾」の字を補つてゐるが、宣長は原文のまゝでアキヤマワレハと訓んでゐる。

一首の意は、春になると、これまで鳴かなかつた鳥も鳴き出し、咲かなかつた花も咲きはするが、春は兎角草木が茂つてゐるので、山に登つて花を手折ることも出来ず、又草が深いために親しく花を手にとつて見る事も出来ない。これに反して秋の山の木の葉を見る時には、美しく紅葉したのは手にとつて賞し、まだ青い葉は枝のまゝ眺めて美しいものだと思ふ。さういふわけだから私は秋山がすぐれてゐると思ふ。

評、「新講」に曰く、「僻案抄に此の歌を評し

バを略してモミヂとのみ云ふをきゝなれて、ふとモミヂに木の葉といふ意あるやうに誤解して、上のコノハと重ならむを恐れて強ひてモミヂヲバとよめるにこそ」と云つてゐる。

【しぬぶ】したふ意がもとにて、忍または愛意にも用ひしなり。こゝは愛る意なり（美夫君志）

【置きてぞ】手にとるに忍びずして、枝においたまゝ。

【歎く】歎賞する。

【そこし】「そこ」は「それ」。「し」は助詞。

【たぬし】樂し。原文「恨之」とあつて、舊訓にウラメシと訓んでゐる。「美夫君志」等はこれに従つてゐる。宣長は「怜之」の誤としてオモシロシとよみ、「古義」ではタヌシと訓

て、額田王は婦人の身であるから、春山に花は咲くけれども、草木が茂つてゐるので分け入つて見る事も、手折る事も出来ないから、春山に對しては恨が多い意を叙べ、次で秋山は分け入るに易く、手折り易いから、秋山に心が引かれる事を叙べたのである。併し秋山とても絶対に恨が無いわけではなく、秋山の紅葉の中にもなほ染めあへぬ枝もあるから、手折らずして差置く恨があるが、春山に較べれば、さまでの恨ではないから、秋山を春山

鑑賞

一首一首の鑑賞或は批評は、それぞれの歌の終に附加したから、こゝでは萬葉集そのものに就て記したいと思ふ、それには島木赤彦氏の萬葉集の鑑賞及び其批評の序言に、要を得て然も萬葉の面目が躍如として窺はれるから次に抄録しようと思ふ。

〔上略〕萬葉集の歌の命とする所は如何なる所にあるか。それは、第一に自己の眞實に徹してゐると

よりも勝るものと判じたのが、面白い所であると云つてゐる。是は「青きをばおきてぞなげく」の解釋を異にしてゐるのであるが、其の作者の心に深く立ち入つて考察した批評の態度は参考になるから、爰に其の概要を掲げたのである。春秋の優劣を闘はせることは、古くから支那に行はれた遊であつて、それを模倣してわが國にも行はれたのであるが、物にあらはれたのはこの歌が最初である。云々。

いふ點にある。(中略)眞實は、又、その一面が素樸率直となつて現れる。萬葉集の歌、特にそのうちの前期ともいふべき時代の歌は、如何にも素樸率直な歌が多くて、子どもの無邪氣な口つきから出る言葉や、地駄々々を踏んで泣き叫ぶ聲を聞く如き感じを與へる歌が多く、それが何れも自己の眞實に根ざしてゐるから、些の厭味を交じへないのである。この期の歌は、多く喜怒哀樂といふ如き單純な感情が歌はれ、その感情が純粹一途に集中してゐるから、作者自ら知らざるに、自ら人生の機微に參し得てゐるといふやうな快い境涯がある。句法の繰返しの多きは、子どもの言語に繰返し多きに似、一語一語の響きにも訥々たる幼なさがある。萬葉集の中期に入ると、歌が追々藝術的に進んで来て、中に、柿本人麿、山部赤人の如き大きな歌人を出して、それらを中心として生れた當時の歌の中には藝術としての至上境と思はれる所にまで入つてゐるものがあるのであるが、それらの歌が、何れも素樸さや率直さから離れてゐないのであつて、つまり自己の眞實に徹して歌はれてゐるから、至上境として眞の力を持ち得るのである。この期の歌は、初期に比べると、歌の範圍が人事自然の各相に亘つて擴がり、而もそれが豊に満ち高く張つて、藝術の要求する崇高性嚴肅性といふ如きものを持ち得て或るものは圓融具足の相に入り、或るものは暢達流動の相となり、或るものは高邁、或るものは蒼古或るものは明澄、或るものは沈潜の姿となつて現れてゐるのである。後期に入れば、中期の藝術的方面を更らに藝術的に押し進めてゐる人々が現れると共に、萬葉の素質的方面から離れはじめるといふ

現象も伴ひ、それらの人々には理智的な觀念的な歌がぼつぼつ目につき、後に現れる古今集の歌風などへの橋渡しをするといふ觀があるけれども大體に於ては、矢張、萬葉集の眞髓を捉へて中期の歌風を繼承したといふべきであつて、全篇四千五百首の歌、多くは、吾々の尊敬すべき命をもち得るに於て充分である。即ち吾々が萬葉集を仰望するのは、單に眞實性の現れなるが故とのみでは盡して居らぬのであつて、それらの素質を押し進めて、藝術の至上所に到達せる歌の種々相から深い感銘を受けてゐるのである。

備考

解釋上の必要から原文をあげたところもあるが、尙参考のため全文をあげる。但し頭詞又は序の原文を前掲したものは、煩はしいから再び掲げない。

- 1. 過近江荒都時柿本朝臣麻呂作歌
或云「自宮」
 玉手次、畝火之山乃、樞原乃、日知之御世、從、阿禮座師、神之盡、櫻木乃、彌繼嗣爾天下、所知
或云「食來」 或云「虛見倭乎置、青丹吉平山越而」
或云「所念計米可」
 食之乎、天爾滿、倭乎置而、青丹吉、平山乎越、何方、御念食可、天離、夷者雖
 有、石走、淡海國乃、樂浪乃、大津宮爾、天下、所知食兼、天皇之、神之御言能、大宮者、此間等
或云「霞立」 春日香蒸流、夏草香、繁成奴留、
或云「霧立」 春日之霧流、百磯城之、大宮處、
或云「見 雖聞、大殿者、此間等雖云、
或云「見 春草之、茂生有、霧立、春日之霧流、百磯城之、大宮處、見

者左夫思母
者悲毛。

反歌

- 1、樂浪之 思賀乃幸崎 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津。
- 2、若浦爾 鹽滿來者 滴乎無美 葦邊乎指天 多頭鳴渡。
- 3、烏玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾 知鳥數鳴。
- 4、春野爾 須美禮採爾等 來師吾會 野乎奈都都可之美 一夜宿二來。
- 5、田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺爾 雪者零家留。
- 6、宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提斯農波由 伊豆久欲利 枳多利斯物能會 麻奈迦比爾 母等奈可利提 夜周伊斯奈佐農。

反歌

- 銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻左禮留多可良 古爾斯迦米夜母。
- 7、冬木成 春去來者 不喧有之 烏毛來鳴奴 不開有之 花毛佐家禮抒 山乎茂 入而毛不取 草深 執乎母不見 秋山乃 木葉乎見而者 黃葉乎婆 取而會思奴布 青乎者 置而會歎久 會許之恨之 秋山吾者。

二五 藝術の圓光

作者

【北原白秋】 キタハラハクシウ。名は隆吉。明治十八年一月二十五日、福岡縣山門郡沖ノ端村に生る。早稲田大學英文科を中途退學した。夙に與謝野寛の新詩社の詩人としてその名を知られ「明星」に詩や歌をのせ、一方河合醉茗の「文庫」における詩人の一人である。歌集には「桐の花」「雲母集」「雀の卵」等があり。詩集には、明治四十一年「邪宗門」四二年「思ひ出」を出して一躍新詩壇の曉將となり、三木露風と相並んで詩史の上に一時代を劃した。雑誌「ザムボア」「屋上庭園」「地上巡禮」「アルス」「煙草の花」等を刊行し、今「近代風景」を主宰してゐる。

又民謡詩人、童謡作者として未曾有の成功をなし、その作は廣く日本に普及してゐる。

詩集「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」「白金の獨樂」「水墨集」「白秋詩集」二卷「わすれな草」等。民謡集に「日本の笛」童謡集に「兎の電報」「とんぼの目玉」「祭の笛」「白秋童謡集」等がある。又右の外隨筆に「洗心雜話」等もある。

出所

【水墨集】 一冊、大正十二年六月、アルス發行。定價參圓五拾錢。

此詩集は、主として短章のものばかりを集められた最近のものである。序文には序にかへてといふ題のもとに「藝術の圓光」といふ氏の藝術論（主として詩論）がかゝれてあり、詩は、「雪に立つ竹」（六篇）「水墨集」（六十篇）「虎の煙草」（八篇）「芙蓉の季節」（八篇）「絲の黎明」（十五篇）「月光微韻」（二十二章）「動き来るもの」（十篇）「初冬の星」（初冬の空（四篇）・冬の裏山（六篇）・弦月三章（三篇）・秋色二章・その他三篇）「落葉松」（五篇）「麵麴と薔薇」（二十六篇）「初冬短曲抄」（初冬短曲（七篇）・どんぐりの秋（二篇））「薄陽の旅」（七篇）「野茨の鳩」（二篇）「圓光の智者」（一篇）が編まれてある。終りに、水墨集解説をかいてかういつておられる「昨年の夏私は詩集「觀相の秋」を上梓した。然しかの集は詩文と長歌體の詩篇を収めたものであつた。本集は主として短章を輯めた。而も純粹に詩集としては本集こそ「白金の獨樂」以來のものである。「白金の獨樂」以來、いろ／＼の事情の下に私は單行の詩集公刊の機會を失つて了つた。三崎詩集「畑の祭」その他がそれである。綜合詩集には兎に角收拾は爲たが、單行詩集の氣品はまたさうした別種の味があるので、何となく濟まぬ心もちで今日に到つたのであつた。

小唄、民謡、童謡集はその前後を通じて可なり公刊したが、「畑の祭」以後、私は主として短歌の製作

に専心したので、純粹の詩作は極めて少なかつた。葛飾、動坂で少々、小田原お花畑で少々、天神山の生活で「觀相の秋」ぐらゐのものであつたらう。

十年の十月、突然に感興が湧いて「落葉松」第十五章の詩が成つた。これが動機となつて私は再び新に詩へ還つて來た。それ故に特に「落葉松」數章は私にとつて忘るべからざるものとなつた。その後今春にかけての作が本集の大部分を占めてゐると云つていい。

但し、葛飾以前のものは全然切り棄て、その當時よりお花畑へかけてのもの若干を綜合詩集より抜き、それに民謡童謡中の新作での極めて特殊なもの若干が加はつてゐる。

これが此の「水墨集」である。私としては久しぶりの大詩集なので、かの「邪宗門」發刊當時の歡びを再び爲る感慨がある。

本集は主として當時の感興を形に残して置きたいと思ふ心で編じた。たまたま民謡童謡等の雜居をも許したわけであるが、本集の全體を通じて私の所謂水墨集の精神、または私自身の今日の境涯といふものが相當に一貫してゐるものと信じてゐる。従つて本集は本集として他の詩集とはまた違つた相當の特殊相が歴々と今日の私自身を示してくれるであらう。(原文のまま)

ここに引いたものはその序文の一部であつて、氏はこの序文「藝術の圓光」の解題にもこういつてゐる。「此の一篇の詩論は、大正十一年九月雜誌「詩と音楽」の創刊號に載せたものである。

詩に對する、あれは私の見地なり悲願である。委曲を盡せばまだ盡くせるとは思ふが、究極するところはあれだけのものとなつて了ふ。省みれば羞耻が深い。」と。この論文は、ここに採録した部分から、更に又詩の言葉と形式とを論じ、終りに藝術そのもの、詩そのものの圓光について論じてこの詩論を結んでゐる。

要 旨

宇宙自然界に存在するあらゆるものは何れも皆それ／＼一個獨特の氣品を有し、充滿し、且之を發揮してゐる。その氣品と香氣とを生々と燃え出した姿——これこそそのものの圓光である。しかもそれが如何なる細微な點に於ても、その氣品、香氣といふものは表れるものだ、だから詩においても同じく、詩はその詩人の内にある獨特の氣品、香氣の香炎であり圓光である。しかもそれがすぐれたものほど、如何なる無心の嬰兒の心にも胸うつものである。詩人たるものは、よく自然の靈感に觸れてそれが眞純一如の香炎體たる直接的直觀の表れであらねばならぬといふ大意である。この熱情溢るゝ様な藝術論——詩論、しかも自然の個々の神靈に觸れ、微入してゐる白秋氏のこの藝術論をよく味ひよく會得する事によつて、詩とは如何なるものか、藝術とは如何なるものかを、未だ藝術的理解に乏しい學び子の頭によくわからせる事である。

段 落

一、詩の香氣と……それは動くものの生きた韻律的美をさへ添加する。(一六八頁五行目まで)。

詩の氣韻、香氣といふものは自ら表れるものである。宇宙自然の一切一物が盡くそれ〴〵に獨特の氣韻を、奥所に深くもつてゐるが、それが如何なる細微の點にまで充滿してゐるものだ。

二、詩の一つ〴〵の……それを思はなくてはならない。(一七〇頁五行まで)。

氣品といふ事を論じてゐるのであつて、藝術上の氣品の貴さといふものは、その詩人その人によるものだ、不純な、誠實なき對境からは決して高貴な氣品は生れぬ。しかもこの氣品こそ世の善惡を超越した絶對のものだといふ事。

三、ここに一つの……すばらしい象徴。(一七二頁三行まで)。

圓光の事を書いたのである。即ち、その詩人獨特に有する氣品、香炎は、内心のあらゆる感情、性質を包含したその人自身の持つすべての香炎體となつて光を放つて燃え上るのである——それが圓光である。

四、さて詩であるが……放心境の快感である。(一七四頁十二行まで)。

詩の價值についてのべたので、詩人はその詩の創造主であるべきだ。詩人の心内のあらゆる包含體であらねばならぬ。それがいゝものほど讀む人により多く、強く感動させるものだ。だから詩人たるものはどこまでもその詩は内心の充實した高貴な氣品と、炎々と燃えのぼる香氣を表せる魅力ある天品の表れであらねばならぬ。

五、詩人が……終まで。(一七四頁七行まで)。

かくも人の心を打つ立派な詩こそは、詩人が自然の神靈に觸れて、そこにその人の心の熔鑪爐の中でそれらの情念、叡智が白熱圓融して、放射された圓光に外ならぬ。といふ事をいつてゐる。

解 釋

【藝術】 ゲイジュツ。(一)學藝と技術と。

(二)美を色彩、音律、言文等によりて表示する手段、美術。(天國) 藝術とは意識或は思想感情の表現で、審美上價値を有する一切の作品を云ふ。即ち、文學、音樂、繪畫、演劇、建築彫刻、舞踊等の如し。(文藝)

(一)藝術の概念は、廣義に於ては、一定の才能及び練習を豫想する人間の活動、即ち技術と同義に用ひられることもあるが、普通はその中、特に美的効果を喚起する特殊の活動及

びその結果を云ふ。時に美術と同義に用ゐられることもあるが、是は普通に音樂及び詩から區別された造形藝術特に繪畫及び彫刻を主として指す場合が多い。藝術の概念は、是より廣く、一般に造形美術の外、詩及び音樂をも含むものとせられてゐる。尤も時によつては、藝術として稍初發的のもの、例へば香に關するものなどが、此の概念の中に包まれることもあるがそれは例外である。又、(二)その本質について自然と人間との關係を問題と

して藝術を考へた昔から、藝術の定義は種々に興へられてゐるが、素より満足したものは有り得ない。藝術の本質は、一言にいへないが、或は生産的活動の過程その者、若しくはその成果所産をも括めて云ふ言葉であるが、此等の諸點の要件を綜合すれば、藝術とは一定の社會に於ける人間の内面生活の要素及び内容を、その心的衝動に基き特殊なる外的材料、技巧、及び様式によつて、美的に表現する人格的活動の過程及び結果あると云ふ事が出来よう。故に藝術にとつては就中肝要なるものは、(一)文化的價值ある精神的内容、(二)その個人的把握、(三)その外的表現である。斯の如くして生産せらるる觀照的成果が恒久的に固定せられたるものを藝術品、藝術

作品といひ、その生産者を藝術家といふ。

【哲學】

【圓光】 エンクワウ。後光(ゴクワウ)に同じ、佛體より放射すといふ光輝。之に象りて佛、菩薩の像の背部に金色の飾物を刻み、又描きたるもの、背光、光背、(因國)佛菩薩の頂より放つ圓輪の光明なり。〔佛辭〕

【詩】 シ。前出、横雲の附西行法師を参照。

【香氣】 コウキ。にほひ、かをり。〔廣辭〕

【品位】 ヒンキ。(一)品格と位地と位。しなから。(因國)他の用に供せられる手段となる處の物件が單に價格を持つに過ぎざるに反して、其れ自身目的である處の人格者は品位を有す即ち他の爲め的手段としての價值、絶對價值の意。〔哲學〕

【言葉】

【さながら】 (一)そのまま、そつくり。(二)のこらず、すべて。〔廣辭〕こは(一)の意。

【躍動】 ヤクドウ。をどり立ちうごくこと。

【鮮麗】 センレイ。あざやかにうるはし。

【字源】

【細微】 サイビ。(一)細くかすか。(二)身分の賤しきにいふ。〔字源〕こは(一)の意。

【我】 ワレ。(一)わがまま。(二)自我の事。心的状態の中にて最も主觀的に感ぜらるるもの。天地萬物に對して存在する一個の人格。(因國)二の意。參考の爲哲學辭典を見ると、自我の意。認識論上と形而上學とに考へられる。形而上學的には、その代表論者フイヒテが彼はその根本原理を所謂事實に求めず、

【氣韻】 キイン。氣品に同じ。(一)高尚なるおもむき。風趣。(二)きぐらいの高きこと。

けだかきさま。(因國)(一)の意。〔廣辭〕に氣韻。みやびたるおもむき。雅なるおもむき。

【巧んで】 タクランで。てぎはよくかざること。〔辭源〕

【白薇薔】 シロベラ。薔薇科の觀賞植物。莖又は葉などに刺あるがゆゑにいばら(茨)といひ略してばら、といふ。或は又しやうび。さうび。古名、宇波良といへり。灌木にして莖直立し、或は匍枝を具へ刺あり、葉は羽狀複葉托葉ありて互生す。花は紅、白等種々あり。美麗にして觀賞せらる。その種類もまた多く廣く培養せらる。〔百科〕

【馥郁】 フクイク。にほひの盛んなる貌。

一切事實に先立つて之を可能ならしめる純粹活動即ち事行に求めた。カントに於ては論理的要請に過ぎなかつた意識一般を形而上化して終極の宇宙原理に高めたものであつて、其自身に於て何物にも制約せられざる對自由活動であるといつてゐる。認識論上では、認識主觀の事で、主觀とか對象とかを認識する者の意である。己が身に一の主宰ありて常住なるもの、とある。

【虔ましさ】 つゝしむ意。【字源】

【いかなる細微……の一節】 ここは、即ちどんな微細な點においても、その人の心によつてなされたる以上は、そこに自然と其人自身が表れてゐる。それはたとへその人には氣がつかなくつても。

では絶對的な定義といふものもない。然し如何なるものを美といふかならばその個性（内包的なもので自身獨特の性質を有し、他の模倣、追従を許さぬ特殊な要素、即ちその氣韻を根定とするが如き要素）及普遍性（前者に反して外延的で對照、均齊、比例、變化、純一等の形式的な部分であるから理性に訴へ客觀的に認め得る要素）と、快感を伴ひ且つ永續性を有するものが美である。【文藝】

【均整】 キンセイ。均〓ひとしくす。とよふ。整〓ひとしくす。事が亂れずして正しくそろふ。とよふ。【字源】

【端麗】 タンレイ。みめかたちのたゞしくしてうるはしきこと。行儀正しくすがたうつくし。【字源】

【粉々】 フンブン。(一)こた／＼と煩はしき貌。(二)亂れる貌。(三)衆く盛なる貌。【字源】ここは(三)の意。

【靈香】 レイキョウ。ふしぎなかをり。くしきにほひ。靈妙なる香料。【天國】

【餘香】 ヨコウ。後に残るかをり。うつりか。【天國】

【完備】 クワンビ。全くそなはること。【音聲】

【美】 ビ。(一)うつくしきこと。うるはしきこと。(二)味のよきこと。(三)褒むべきこと。總べて意慾を刺戟せずして內的快感を惹き起こすものにて、多様の純一部分の調和によりて成立し自己目的のもの稱。【天國】

一言に云ひ盡す事は極めて困難であり、又今

【海螺】 ホラ。普通法螺とかく。ほうがい。

前鰓類に屬する螺。介殼は螺旋形をなし、外部全表面に不規則なる瘤起散在して且虎斑あり。長さ五六寸位。此介の頂を磨り、孔をあけて吹けば遠くひびく。【廣辭】

【甲羅】 カフラ。(一)甲に同じ、貝の殼の事。

(二)積みたる年功。ここは(一)の意。

【小楊枝】 コヤウジ。齒牙の間に溜まりたる垢滓をほじり出す楊枝。つまやうじ。【天國】

【素肌】 スハダ。(一)あかはだか。まるはだか。(二)甲冑を著せざること。【天國】

【大理石】 ダイリセキ。成分は炭酸カルシウムにして通常純白なれども、不純物のために縞をなすものもあり。裝飾及び建築用の材とす。【天國】又、方解石より成れる岩石。通常は

粒状なる石灰岩を指す。されどもし磨きて美しくなる石灰岩は大理石と稱せらるることあり。白色なるもの多しと雖も他の礦物を含みて灰、青、緑、黄等の色彩斑紋を示すものなり。大理石は變質岩の一種にして石灰岩の變質に基くものなり。常に層状又は扁豆状となり各時代の地層に露はる、又石灰石の火成岩に接觸して變質せしものあり。我國にては長門の秋吉、常陸國眞弓山等に産す。外國にてはイタリヤカルララ産名あり。又支那雲南省大理府附近に産す。之より大理石の名あり。同科大理石の様な美しいひかりがあつたのである。

【意識】 イシキ。感覺、感情、觀念、欲求等あらゆる心の作用が現に働きて、しかも是れ

等の諸作用を、心自ら知覺し居る状態。【天國】心の醒めて「おぼえ」ある状態、又單に「識」とも稱す。夢うつつの如く心の状態の不明なるときはこれを半意識といひ、熟睡の時の如く全くおぼえなき状態をば無意識といふ。これらの語に對して通常の醒覺状態を全意識と呼ぶ事あり。元來意識は或時間内に連絡して起るものにして永久に存続するものにあらず。故に意識は一種の精神過程にして、時々刻々變動するものなり。此點に於て、意識は時間の制限を受く。(二)佛教上では八識中の一(第六識)に當る。萬の見る事聞く事を分別し、又見も聞きもせぬ事物をも思案考慮する心なり。【同科】

【刺青】 イレズミ。シセイ。いれずみのこ

と。【字跡】 天國には入墨とかく。(一)古への刑名、腕若しくは額などに傷をつけ墨をさして犯罪人の目標とするもの。(二)ほりもの、(三)入筆すること。【天國】

【攝理】 セツリ。他人にかはりて事をさめ處置する。【字跡】(一)代はりて處理すること、代理。(二)すべをさむること。すべ括ること

【天國】ここは(二)の意

【智慧】 チエ。物事を分別、知識し、又は計畫處置する心の作用。智【天國】

【神意】 シンイ。神のこころ。神のおぼしめし。【天國】

【入念】 ニユウネン。念の入ること。ねんいり。【廣辭】

【丹精】 タンセイ。丹誠ともかく。(一)心を

こめて物事をする事。まじめに事をするところ。(二)いつはりかさりのなきところ、まごころ。ここは(一)の意。【天國】

【神技】 シンギ。かみわざの意。

【靈徳】 レイトク。靈妙なる徳。【天國】

【冷え冷え】 ヒエヒエ。しみくくと感じさせる。

【蝸牛】 カタツブリ 有肺類に屬する貝。「まひまひ」、「ででむし」の名あり、陸上に棲息す。其介殼は螺旋状をなし、體は柔軟にしてその縮まるときは全く殼中に收容せらる。而して、ある事決してなし。頭に二對の觸角あり。上なる一對は長く、眼は其末端に在り。下なる一對は短し。【同科】

【蝨斯】 ハタオリ。蝨蟬もかく。直翅類に屬

する「ばつた」の一種。「はたおり」の名は翅と肢とを觸れてはたはたと音を發するより起りしものにて、唯々一種の昆虫を指せるや否や不明なり。古來之を「ぎりぎりす」なりとなす説と、「しやうりやうばつた」となす説とあり、而して現今各地にては前二種及「とさまばつた」に用ふるが如し、故に「はたおり」の名は用ひらる場所によりて必しも同一にあらざれど、最も普通に「しやうりやうばつた」を指すものなり。本種は體長、雄は一寸餘、雌は二寸五分體長く、頭部は圓錐狀をなし、頭頂は前方に長く凸出し、觸角は多節より成り、短く扁平にして矛狀をなす。翅は先端尖る。絲色、褐色又は兩色混じり或は黒褐色點斑を有するあり。普通此の雌を「はたおり」

といひ、雄を「はたはた」といふ。禾木科植物多き原野に多し、百種

【芒】 ノギ。(一)稻、麥などの果實の外殼の尖端に生ずる剛き毛狀のもの、のげ、(二)喉にささりたる魚の骨など。とげ。天國ここは(一)の意に用ふる。

【素朴】 ソボク。(一)かざりなく、人為なく原始のままなること。ありのまま(二)いつはりかざりなくありのままなること。すなほ、(三)未だ組織的研究を経ざること。未だ學問的考察をなさざること。天國ここは(一)の意。

【逆さとんぼ打つても】 その「はたおり」か、さかさとんぼがへりをしても。の意。

【韻律的】 インリツテキ。律格、詩形の事。

【神格】 ンンカク。神の資格。廣辭

【人為的】 ジンキテキ。人間の行爲の加はるにいふ語。天國

【粉飾】 フンシヨク。(一)けしやうすること。(二)うはべをかざること。廣辭ここは(二)の意。

【妙技】 メウギ。たへなるわざ、すぐれて巧みなる腕前。天國

【不純】 フジュン。天真でない事。いつはりのあること。詳漢

【粗暴】 ソバウ。舉動のあらあらしきこと。亂暴。天國

【傲岸】 ガウガン。たかぶりてかどかどし。廣辭

【信義】 シンギ。まことにして正しいこと。

【天國】 律格詩の形式である。即ち詩を散文から區別する唯一の條件で、言葉を音樂的に表現する方法である。普通音位、音度、音長音數の四形式を音樂的に最も美しく組合せたもので、音度、音長に基いた音性律、音位に基いた音位律、音數に基いた音數律がある。文藝つまり、リズムカルなことで、リズムとは、節奏、韻律、律動等に譯し、人に美的情緒を起さしむべき線、形、色彩、音などの秩序ある運動をいふ。文藝

【靈魂】 レイコン。たましひ、に同じ天國肉體又は物質より離れて自ら存在すと思惟せらるる精神現象の本源、たましひ。廣辭

【信實】 シンジツ。まめやかなること。いつはりかざりのなきこと。りちぎ、忠實。天國

【誠實】

セイジツ。いつはりなくまめやかなること。まじめ。天國

【對境】

タイキヤウ。精神又は認識の目的物。客觀の事物。廣辭對象に同じ、總て精神活動の目的物、即ち慾求若しくは認識の目的物。天國

【恐懼】

キョウク。恐怖に同じ。おぢおそれること。ふるひおそれること。詳漢

【似而非風流者】

エセフウリウシヤ。似而非は普通又似非ともかく。(一)其のさまして實は然らぬ。(二)その物とも見えぬ見苦しき。卑しむべき。天國ここは(一)の意、風流(二)みやびなること、俗ならぬこと。(三)美しく飾ること、數寄をこらすこと。(三)作

りものなどして觀せ物にすること。天國こゝは(一)(二)の意。眞實そうでなくうはべをかざつたにせ風流者のこと。

【俗南畫家】

ゾクナンガウカ。世間なみくゝのえかき。南畫は南宗畫に同じ。東洋畫の大流派。支那唐時代に江南に發り、王摩詰を宗とするもの。本邦へは、足利時代に少しく渡來し初め、元祿年中にいよゝゝ之が傳はつた。その作法上、其皴法は披麻、解索を用ひ、描寫法の如きは曹衣、遊絲等を好む。柳里恭、池大雅など最もすぐれた代表者である。北宗畫に對立す。天國(同前)参照。

【骨董商】

コツトウシヤウ。骨董を商ふ人。骨董とは古道具の意。天國

【道德的】

ドウトクテキ。道德に關するこ

と。道德とは、人間の思惟及行爲の標準、みち。人間の遵奉すべき理法と、其理法を體得する行爲と、即ち正善なる意思によりて正善なる行爲をなすこと。廣辭

【高潔性】

コウケツセイ。けだかくしていさぎよきこと。いやしからずけがれなきこと。廣辭

【世の善惡の上にある】

最上の氣品、氣韻といふものは、それが善だとか惡だとかいふ境地を超越した絶對的上位にあるの意。

【萬有】

バンユウ。時、空の間に存在するあらゆるもの。廣辭

【白芥子】

シラゲシ。芥子。罌粟料の一年生草木。地中海地方原産。廣く園圃に栽培せらる。莖は平滑にして直立し、高さ三、四尺。

葉は無柄にして互生し、基部は莖を抱く。長隋圓形にして縁邊分裂し淡綠色を呈す。五月頃花を開く、花冠は四瓣にして下垂し、紅、紅紫色紫色等にて頗る美しく蒴果は球形をなす。種子は食用にし、未熟の果實の乳液より阿片を製す。廣辭。白芥子はけしの變種で、花も種子も共に白色なり。莢は卵球狀をなす。同前

【蒼穹】

ソウキユウ。あをくゝと見ゆる穹窿形の天空。おほぞら。あをぞら。廣辭

【白芥子の云々】

白芥子の中に表れた氣品を知るは、やすく誰もがする事だがかの大空をみて大空の中に、圖り知る事の出来ぬ貴さを仰がないでゐるのはかなしむべきであるの意。

【最小限度】 サイシャウゲンド。最も小さきかぎり。[廣辭]

【思慕】 シボ。おもひしたふ。戀。[辭源]

【根本精神】 コンボンセイシン。精神の根本となるもの。

【隱者風】 インジャフウ。隱者二世を捨ててかくれ居る人。[廣辭]世すて人の様に。

【消閑】 ショウカン。ひまけし。ひまつぶし。[廣辭]

【また氣韻なるものを……】 氣韻といふものを小さくくせせこましくかざられたものに解釋する人は、この様に氣韻を知る事によつてそのものの根本精神、を思ふ所の鍛練とするものに對して、世捨て人のするひまつぶしの遊だとする。がそれは、甚だしい誤つた

思ひ方であるといふ意。

【小曲】 ショウキョク。短き歌曲。こうた。[廣辭]

【大管絃樂】 ダイクワンゲンガク。オーケストラの意。[廣辭]洋樂に於て數多の樂器の種類を用ひて重音の器樂曲を合奏すること。オーケストラに於て中心となる樂器は絃樂器にして、これに於て管樂器及び擊樂器を添へて賑かにす。往時の小管絃合奏は絃樂器のほかに二三の管樂器を用ふるのみなりしが近時の進歩せるコンチエルト・ヴロツンには多數の樂器を包含す。[百科]

【畢竟するに】 ヒツキヤウするに。すはすの誤。つまるところは。つまりは。[言葉]

【本體】 ホンタイ。これには種々の意義があ

る(一)常識的には聲音、形相等に具有する一箇體の義。(二)事物の性質を論ずる本質の義。(三)哲學上にて種々の現象の生じ來るところを究めて此の諸現象を生ずる實體の義。[百科](二)(三)の意。

【因由】 インユウ。事のおこり。原因。[字源]

【香炎】 コウエンシ。その林檎のもつ香及び氣韻の炎。に感動される。

【本質】 ホンシツ。すべて物を物たらしめる性質。その物の成立には缺くべからざる要素をいふ。[哲學]

【心核】 シンカク。くだものの實の心をつぶ。

【綜合】 ソウゴウ。(一)箇々別々のものを集めあはすこと。(二)箇々別々の概念又は觀念

若しくは判斷を結合して、新なる概念又は觀念、若しくは判斷を作成すること。[廣辭]こは(一)の意。

【魅惑】 ミワク。まどわす。ここはその香炎に打たれてぼんやりする。

【柘榴】 ザクロ。安石榴科の落葉木又は灌木。ジャクロともいふ。原産地はベルシヤ及アフガニスタンより西ヨーロッパの西南部なるバルカン半島より東はアジアのヒマラヤ地方に至る中間の諸地。幹は高さ七八尺から一丈。葉は對生長橢圓形。小暑前より花をつく。花瓣五枚乃至八枚。披針形又は倒卵形うすくして凋む。深紅色その他の色がある。みざくろは秋實を結ぶ。種子表はる。紅白二種の種子の種類がある。紅きものの中に又甘酸

の別があり。甘をあまざくろといふ。**【百科】**
【放射光】 ハウシヤクワウ。するどく矢の様に放ち發した光。

【ひわれる】 ひわる。(一)干て割る。(二)乾きて裂く。(三)きず生ず。**【廣】**ざくろの實の自らわれて種子の見える様にいつたのである。

【宙】 チウ。空中**【廣】**

【聖】 セイ。(一)智徳最もすぐれたること。事理に通達せざる所なきこと。(二)智徳最もすぐれて天下萬世の仰ぎて師表となす人。神聖なこと。等。**【廣】****【信】**即ち靈妙にして貴く殆んど神に近きものをいふ。

【科學】 クワガク。日常個々の知識より出立してこれを統一し組織して一科の學となせる

しれないが、事實は明かでない。

【歡喜】 クワンキ。甚だよろこぶ事。大悅。

【哀傷】 アイシヤウ。悲しみいたむ、悲しんで心をいためる。**【廣】**

【憤怒】 フンド。或はフンヌ。いきどほりかかること。**【廣】****【言】****【象】****【廣】****【因】**皆兩方の讀方をす。

【怨嗟】 エンサ。うらみなげくこと。**【廣】**

【憎惡】 ゴウヲ。にくむ。きらひいやがる。**【廣】**

【悔恨】 クワイゴン。くやしきさんねんに思ふこと。**【廣】**

【心象】 シンゾウ。過去に於て意識に映じたる外界の像の後再び意識中に現出したるも

もの、ラテン語の知識といふ語より出て、一般に組織立てる知識の意なり。すべての科學は其根底に於て自然法の存在を豫想し、實驗觀察比較、推理等に依て固々の現象より一定の自然法を發見せんとするものなり。**【百科】**

【燕麥】 カラスムギ。禾本科の一年生草木、廣く培養さる。殊にヨーロッパ中部と北部が盛。高さ二尺許り。平滑なり、葉は細長にして尖り下部に鞘あり、二花相集まりて小穂花をなし通常その中に一花のみ長き花を具ふ。小穂花は更に複繖花序に排列す、外殼は平滑なるか又は單に其基部にのみ毛茸あり。種子を食用に供す。又葉莖などを牧草となす。**【百科】**こは、電子論の立場からいつて、或は燕麥の穂にそうした背光が認められるのかも

の。**【廣】**、心像の事。意味が種々に動搖するが大體上狹義には、直接の外界刺戟が現存せずして單に思ひ浮べられた或る事物に就ての客觀的意識内容をのみ意味し、廣義には更に外的刺戟の存在する場合をも含む。従つて前者は記憶及び想像の如き再生の場合にのみ適用せられ、後者に於ては更に知覺の場合にも用ゐられる。**【廣】**

【純愛】 ジュンアイ。いつはりなくかさりけのない愛。**【廣】**

【信實】 シンジツ。まごころ、ほんとうに。**【廣】**

【信仰】 シンカウ。神佛をあてにしたのみすがる。**【廣】**

【慈悲】 ジヒ。(一)あはれみかなしむ義、い

つくしみ、なさけ、仁愛。二こほとけのあはれみ、すくひ。〔詳漢〕

【智恵】 チエ。物事を分別し知曉する心の作用、物事を計畫し處理する心の作用。〔廣辭〕

智慧ともかく。さとり分別する心のはたらしき。〔詳漢〕

【否定的】 ヒテイテキ。然らずとなすこと。非とする事。〔廣辭〕

【心状】 シンジヨウ。心のありさま。〔廣辭〕

【銷沈】 セウチン。元氣がきえてなくなる。〔字源〕

【麻痺】 マヒ。身體の局部又は全般の感覺なくなる。しびれる。〔廣辭〕

【冷笑風】 レイセウフウ。にがわらひすること。あざわらひ風に。〔廣辭〕

言王なるがゆへに明王と稱す。〔佛敎〕

【火焰】 クワエン。ほのほ。〔大國〕

【佛陀】 ブツダ。前出。西行法師の章参照。

【基督】 キリスト。Jesus Christ。基督教の開祖。父はヨセフ。母はマリヤ。パレスチナの

一部分ガリラアの田舎ナザレト村に生る。父は大工の業なりし。イエスの生れし年を以て西洋曆の紀元となせど實際は紀元前四年に當る。クリスマス十二月二十五日を誕生日とすれど確たる所據なし。彼が一生は新約聖書に收められたる四卷の傳記即ち四福音とパウロの書翰とによりて知らる。馬太路マタイ加福音書にはイエスの母マリヤ未だ夫に嫁がざる前神靈の方によりて懐胎してイエス生れたりと記し代々の信者之を信す。三十才の時、神の國

【淡々たる】 タンタンたる。淡如に同じ。あつさりしたさま。さつぱりしたさま。〔詳漢〕

【情念】 ジョウネン。感じておこる想念。〔廣辭〕

【密度】 ミツド。單位體積中に含まるる物質の量。即ち物體の質量を表はす數を其の體積を表はす數にて除したる商。〔大國〕

【不動】 フドウ。不動明王の事。Arvaca-lana-チ阿遮羅曩他。不動尊又は無動尊と翻す。

不動使者ともいふ。密敎の諸尊を三論身の分類に依て總判するときは大日如來を一切諸の總として自性輪身と爲すに對して、この尊を一切諸佛の敎令輪身と爲す。……(中略)これは大日如來の敎令を奉じて忿怒の形を呈現し、一切の惡魔を降伏する大威勢を有する眞

の人間に近きをといて人民に悔改を促したヨハネに洗禮を受け聖靈の感化により彼の意識に一大變化ありて、自ら神の子たりとの意識明かになる。それより種々な誘惑と戦ひ、激烈な苦悶をなし救世の規模、傳道の計畫につとむ。其の後ユダヤ地方でヨハネと相應じて敎を説きしが幾くもなく北方ガリラアに退きカベルナウム都市を根據として道を傳ふ。彼は神は父なる神にして其愛深く人の罪を悲しみ悔改を求むる神なる事、人の道は當時の人の思へる如く煩はしき儀式風俗を守るにあらずして讓りて罪を悔ひ心を盡して神を愛し人を愛するに在る事を説けり。初めユダヤ人等多く之の敎を信仰しひたすらこれに頼るものも出來しが彼等の根本は政治的救世主たるよ

りイエスの心靈の教とその旨合はず遂に彼の弟子ユダの爲に賣られて、ユダヤ人の壓迫によつて、イエルサレムの城外ゴルゴタの丘にて十字架にかけられて殉教す。彼十字架上にて己を殺す者の罪を許さんことを神に祈り、母マリヤを愛する一人の弟子に託し遂に「父よ我靈魂を汝の手に托す」と祈りて後息絶えたり。時、紀元三十年、傳道開始してより約三年を経たり。イエスの品性は單純柔和にして慈愛に富み婦人小兒も親み近くべかりしと共に又儼然として犯すべからざる權威ありき。彼の教訓は神又は神の國に關する、彼自身に關すること、救に關する事及倫理的教訓に分つことを得。神は完全なる善にして聖と義と愛との性質を具へたる父なる神なるを説

けり。當時の人が神を超越的に近づきがたき存在と見たるに反し、神は極めて人に近く罪人を愛し憐みて悔改を求めたまふ神なるを教へたり。彼は一面に於ては純然たる人間の一人たると共に一面又神より遣されたる主者救主なりと自覺したり。又人の靈魂は無限の價値あるを説き罪を悔改して神の救によつて永遠の生命を受くべきを教へたり。イエスの倫理觀は其内部的なること純一あること熱情を帯びたること今まで人の重んぜざりし謙遜忍耐等の徳を重んぜしこと等特色あり。神を愛し人を愛するは其道德の二大綱目にして神の完全なる如く完全なるは人の品性の極致たるを説けり。〔同〕

【まさしく】 たしかに。〔同〕

【直觀】

チヨククワン。直覺とも譯す。思惟によつて間接に物を知るといふ事に反して直接に物を知ること。即ち心が直ちに物を映する事である。それで物を見るとか音を聞くとかいふ如きことも固より直觀と考へ得るのであるが心内の事物に對しても之を直觀するところが出来る。此故にこの語は、感覺とか知覺とかいふ意義よりも廣い。時に全く理想的なものを直觀するといふ事が出来る。……〔哲學〕經驗や觀察等の理性の下で科學的方面で得た智識でなく、自己の心が直接その本體なり意義を感じて知る事である。例へば神を認識するとか、人を一見して如何なる人たるかを感じするが如きである。〔文藝〕

【象徴】

シヨウチヨウ。ものそれ自身が説明

を要せずして直接に或意義を發揮すること。例へば花は美貌を、劍は武勇を象徴する等はいふ。〔國語〕文藝辭典に象徴とは比喩の最も進んだものである。といつてゐる。

【創造主】

ソウゾウシュ。創造ははじめ造ること。造り出すこと。〔國語〕即ち、萬物は其實質上現存の状態に神によりて創造せられたりといふ創造説があるが、神が宇宙の混沌を整理して無より萬有を初めて造り出す様に、詩は藝術の方面に於ても、詩人たるものは、詩の創造者であらねばならぬ決して模倣とか、いふ様な不純なものでなく、その人獨特に詩の神、初めてつくり出した人たるべきである。といふ意。

【純一無垢】

ジュンイツムク。純一はまじり

けないこと。〔詳漢〕無垢にけがれのなきこと。〔詳漢〕

【潑刺】 ハツラツ。魚のをどりはねるさまにいふ。〔詳漢〕大へん元氣のいふ事。

【棕栢】 シュロ。棕櫚科の常緑喬木。對島琉球臺灣等の暖地に多く産し、内地にも多く之を栽培す。幹は圓柱形直聳す。枝なし。幹の全部に褐色の長き剛毛を生ぜる古き葉鞘にて包まれ、是れをばぐ毎に節を表はす。幹頂に數多の葉を叢生して四散す。葉柄は太く長さ二三尺、上面は少しく凹入し下面は凸出し兩縁は平滑なるか又は細齒を列生す。柄頭より長隋圓形の葉片を四出すること人手を開く如く、恰も車輪狀をなし本は合して末は分る。葉柄共硬靱にして光澤あり四時凋まず夏細花

をつける。花は黄色。葉鞘の毛を掃などに利用す。〔百類〕

【豹】 ヘウ。獸の名。亞細亞及び亞弗利加地方に産す。形虎に似てすこしく小さく、虎よりも一層猛く、能く飛走して、他獸を捕へ食ふ。背は黄赤色にして黒き環狀の斑點ありて美しく腹は白し。〔百類〕

【溪谷】 ケイコク。谿谷ともかく。たにのこと。〔詳漢〕

【包含體】 ホウガンタイ。すべてを含みつゝんだものをいふ。

【直接性】 チョクセツセイ。(一)間に他のものがなくて直に相對すること。(二)さしつけ〔廣〕直接とは最も一般的にいふも、二物間の關係に第三の仲介者を容れざること。……

(粵)即ち主客の未だ別たれない直下現前の意識狀態をいふ。〔哲學〕

【天稟】 テンピン。天よりうけた性質。〔字源〕

【蠱惑】 コワク。まどはすこと。たぶらかすこと。〔詳漢〕こゝはまどはすの意。

【思慮の外云々】 考へるとかそんな間をおかない。いゝ詩はたゞよんでそのまゝすぐ直接に人の心に感動をあたへる魅力があるの意。

【恍惚感】 コウコツカン。恍惚(一)物事に心をとられてうつとりすること。(二)ほのかにして分明ならざること。〔廣〕こゝは(一)の意。

【誘致】 イウチ。さそひいだす。おびきよせる。〔字源〕

【音律】 オンリツ。(一)おんのでうし。こゑのしらべ。(二)轉じて音樂の稱。〔廣〕

【レコード】 (一)記録、(二)蓄音機の平圓板音譜をいふ。

【泰西】 タイセイ。歐米の總稱即ち西洋。〔廣〕

【感覺】 カンカク。神經の末端に觸れたる刺戟が、神經纖維を傳はりて腦の中樞に達して起る單一の意識現象。特殊感覺、普通感覺有機感覺に分つ。〔廣〕廣義では感情をも込めてすべて内外刺戟に因つて直接惹起せられた意識内容、狹義では感情と對立し、刺戟其物の性質に歸せられる意識の客觀的内容をいふ。〔哲學〕

【童謠】 ドウエウ。(一)兒童のうたふうた。

(二)はやりうた。(天國)又童謡は、古代は、民間の流行唄「わさうた」とも訓ず日本紀、古事紀などに見ゆるものは當時の或る社會事象の豫言的な役目を務めてゐる。それから後は徳川時代等全く流行歌の意味だけの有するに至つた。しかし現今では之と全く異つてゐる。即ち之に二義あつて、一は兒童のうたふ歌ではあるが、その根本が前と全く異つて兒童自身の創作にかかる詩をいふのである。第二義は大人が筆を執る場合の童謡で一口にいふと、「藝術的唱歌」といふ様なもので一口には定義を下しにくい。……(西條八十、童謡講座)ここでいふのはその最後のものをさしてゐるのである。

【無心】 ムシン。心なきこと。何の考へもな

きこと。思考なきこと。(天國)

【鑑賞】 カンシヨウ。書畫其の他藝術上の作品を鑑識し賞美すること。(廣辭)

【洗煉】 センレン。よく考へて思想または詩歌の字句を工夫すること。(廣辭)

【突如】 トツジヨ。突然の事。(廣辭)

【ユーモラス】 有情滑稽ともいふべきで、滑稽の一種である。普通單純な滑稽味でなく一種の複雑な微妙な心の表でその滑稽に對して我々が同情の心持で以て之を眺めるのである。一言でいへば涙をもつた笑ひといふべきである。

【靈感】 レイカン。(一)神佛の靈妙なる感應。(二)インスピレーション。(廣辭)人の直感を通じて與へらるる理性にては普通判斷の出

と。(廣辭)

【印象】 インシヤウ。(一)物の面に形象を印すること。又其の印したる形跡。(二)一定の刺激を受けて感覺を惹起する生理的作用。(廣辭)

【放心境】 ホウシンキョウ。放心に精神を注がざること。心をとめざること。(二)外に馳せ向ひてしまりなき心。外物にまよひて本體を失ひたる心。等(廣辭)こゝは(一)の意の境地をさす。

【自然相】 シゼンソウ。自然のすがたのこと。

【神機】 シンキ。靈妙なる活動。變化極りなきはたらき。(廣辭)

【熾烈】 シレツ。光、熱などのはげしいこ

來ぬ靈妙なる力といふ意。例令ば詩人や藝術家の卓越した作品を出す時など人間以上のある偉大なる精神より或靈妙な力が加へられる。其與へられ直覺的な能力。(天國)又哲學辭典を参考の爲にくつてみると「藝術的創作の内面的一契機として、心的要素が一種の説明すべからざる無意識的過程によつて、忽焉として美的形象に結成せらるる場合を一種の神秘的過程になぞらへて云ふ概念。」とある。

【思想家】 シンウカ。思想に耽る人。思想の豊富なる人。思想。かんがへ。おもひ。又經驗と思考とによりて生ずる意識現象。(廣辭)

【觀】 ミ。とくと念を入れてみる。(廣辭)

【識り】 シリ。物事をさとする。心得る。(廣辭)

【瞻仰】 センギヤウ。あふぎみてしたふこ

と。〔詳述〕

【叡智】 エイチ。知の事で、廣くいへば認識を得る能力、或は認識の所有或は或人が認識思惟の能力に勝れた素質をも指す。〔哲學〕

【白熱圓融】 ハクネツエンユウ。白熱（一）物體が白光に近き光を放つに至るほど高熱となりたること。（二）情熱の最高調に達したること。〔備註〕ここは（二）の意。圓融（一）一切諸法の事理遍く融通して無二なること。〔備註〕

〔備註〕には「エンニウと讀む。圓は周遍の義。融は融通融和の義。若し分別妄執の見に就かば萬差の諸法盡く事事差別すと雖、諸法本具の理性によらば事理の萬法遍く融通無碍にして無二無別なること猶水波の如くなるを圓融と云ふ。煩惱即菩提といひ、生死即涅槃とい

も、衆生即本覺といひ娑婆即寂光と云ふ共に是れ圓融理趣なり。」といつてゐる。

【眞純一如】 シンジュンイチニヨ。眞純（一）しんじつにしてまじりけなきこと。〔備註〕一如（二）相異らざること。二ならざること。〔備註〕圓融には一とは不二の義。如とは不異の義。不二不異を名て一如といふ。即ち眞如の理とある。

【法悦時】 ホウエツジ。法悦の境にゐる時。法悦とは信仰より生じくる心中のよろこび。法をきき又は思惟することによりて生ずる悦喜をいふ。〔備註〕

【至妙境】 シメウキョウ。至妙な境地。至妙は至つて妙味あること。又そのもの極妙。〔大國〕

【埒無く】 ラチナク。埒（一）馬場の周圍に結べる垣。をいひ、埒なくとは、物事のきまりのないことをいふ。

【散文系】 サンプンケイ。散文系統のこと。で、散文は韻文に對する語で詩でない文章は皆この散文の中にぞくす。〔文藝〕

【自由詩】 ジユウシ。自由に思想を抒述する爲從來の詩に關する形式を脱したる新體の詩。〔備註〕

【煉金の云々】 レンキンの……。普通煉金とは往昔アジアの西部及ヨーロッパに行はれし一種の化學で、卑金屬を化して黄金となし、又萬物融解藥、及長命藥を製出せんとするに

鑑賞

藝術の價値を、詩人の人格を圓光と眺めた所に白秋氏の藝術に對する敬虔な崇高さの心持がよくわ

あり。十七世紀頃にこの術に託して禍福をトする事行はれ或は銅に砒石を混じて生ずる銀色物を銀貨として通用せしめたる事あり。しかし現今は、現今知らるる諸元素が所謂元素にあらずして化合物なることを證せらるるにあらずんば卑金屬を化して金となす事は到底不可能なりとてこの術の研究は全く没却せらるるに至つた。しかし之が今日の化學發達の基礎となつた〔備註〕だがここでは、その事をいふのではなく詩人が宇宙の靈感にふれて之をよく識りよく觀てやがて之を白熱圓融して眞純一如の韻律ある香炎體とすべき詩人の心をいふのである。

かる。氏は藝術の根本を説いて、すぐれた藝術は、詩は、言葉や韻律を超越した所謂藝術家の獨特の氣品、香氣の表れの如何によるものだといつてゐるが、かうした見方は單に白秋氏が頭の中で藝術をこねまはし思慮にかけて考へ出した詩論では決つてない。自然の奥所の神靈に深く觸れてゐる白秋の一種靈妙な直觀と、溢るゝが如き詩に對する熱情とのもとに書かれたものである。又自然に對する白秋氏は、自然の個々が單に一個々々の形態の存在ではなく單なる個々の精神の存在のみではない。自然個々の神靈がひしひしと白秋氏の心に融合徹入して靈感と靈感との觸れあふ存在である。だからこの詩論においてもその氣品の薫り、圓光の焰が音となり熱となつて、感覺的に我々の胸を打つ。殊に林檎の見方、柘榴の圓光に鋭い氏の直觀性に感動しないものは禍であるといつてもよからう。之によつて氏のあの感覺的な詩、直觀的熱情の高貴な氣品のあふるゝまゝなるあれらの諸詩が作り出され、放射されるのである。又そのかきかたにおいても、言葉に無駄がなく、洗練されて、一言一句靈感のひびきある藝術論であつて、讀めば讀むほど我々の心にひびくあるものがある。

備考

- 原文との差異。之はかなり多い今箇條書にして並べてみる。
- 一、一六六頁。()の中は原文。
 - (イ) 一行目——その詩に表すのである。(その詩に持ち來すのである。)

- (ロ) 五行目——生れ出づる(押し上げる)
- (ハ) 七行目——薄い葉(薄の葉)
- (ニ) 末行——眞の氣韻(眞の、つまり氣韻)
- (ホ) 末行——奥所に籠る處しき美德(奥所の美德から)
- 二、一六七頁。
- (イ) 二行目——先づその(一先づその)
- (ロ) 四行目——海螺を見た(海螺の素肌を見た)
- 三、一七〇頁。
- (イ) 五行目——それを思はなく(これを思はなく)
- (ロ) 十行目——それではない(それでない)
- 四、一一七一頁。
- (イ) 末行——淡々たる心狀(淡々たる。)
- 五、一七二頁。
- (イ) 六行目——放たれたる詩(放れた詩は)
- (ロ) 末行——魅力とを以て(魅力と靈感とを以て)

六、一七三頁。

(イ) 四行目意味すらも通じない嬰兒にでも(意味すら通じない嬰兒に於ても)

(ロ) 十一行目——父親自身の創る……(父親の歌ふ父親自身の創るところの)

七、一七四頁。

(イ) 一行目——多分あつた。(多分にあつた)

(ロ) 七行目——例ていへば(例に於ても)

(ハ) 末行——人間の情感に(人間思慕の愛慾に)

八、一七五頁。

(イ) 一行目——熾烈な情、(熾烈な情念)

(ロ) 四行目——詩の多くがある。(詩の始どがある)等である。

参考の爲に氏が水墨集の跋に云つておられる詩についての感想を掲げておく。

「私は詩の究極としてはその圓光を思慕してゐる。聖なる絶對の境涯だからである。然しその圓光なるものも他より初めて瞻仰する事であつて、彼等古聖たち自身はそれ自らの圓光については何等の知るところが無かつたであらう。虚心坦懐であつたらう。さうで無ければあれほどの突々たる神采は拜めないにちがひない。況して私ごとき鈍根者にはただかの絶對至妙境を思慕する事によつて、幾分で

も自己の下凡を救ひ得ようかと願つてゐる。我自らの圓光などは考ふるさへ恐懼すべき事である。世には私の詩論を正しくは讀まうとも爲ない多くの評家を見るが故に、愚かな私は常に本然の微笑さへも鎖されがちである。

要するに私は私である。私はただ私の境涯さながらの詩を願ふ。此の所念は一の禮拜である。」とある。

生 命

北 原 白 秋

光りかがやく圓きもの
あたりまばゆくふりかへる
光りかがやく圓きもの
あたりまばやく目をつぶる
光りかがやく圓きもの
光り澄みつゝ掌を合す

二六 日本文學の展開

作者

出所

土居光知。ドキミツトモ。高知縣の人、明治四十三年東京帝國大學英文科卒業、東北帝國大學教授

【文學序説】 東京岩波書店發行。本書は大正十一年の出版であるが、震災に紙型を焼失し、昭和二年更に増補して出した。定價四圓參拾錢。

本書に就いては著者自ら第一版序に左の如く述べてゐる。

「此書は日本文學の基礎的な問題に關する考察の結果を集めたものである。私の專攻は英文學であるが、その方面の研究は多少親密に再考してみる機會が與へられることを期待して、この書中に加へることを控へた。外國文學に親しんでゐるその際に得た暗示をもつて自國の文學を顧みたくなりそれになすことが、外國文學研究者の一任務であるやうにも考へられる。かくして外國文學も對照して考察することによつて、日本文學を如實に見、その獨特な展開の理法を見出さんとしたことが、本書の目

的であつて、ある學説を基礎にして、我國文學を整理せんとしたのではない。云々」

内容は、「原始時代の文學」「日本文學の展開」「詩形論」「自然の愛の發達」「國民的文學と世界的文學」「近代英文學に於ける批評的精神」「藝術的形象」より成る。

本課は「日本文學の展開」を簡略に書きかへたものである。

要旨

已往五ヶ年間の國語教授に於て斷片的ではあつたが、國文學の種々相を學び得たわけである。それ等を統一するといふことは必要のことである。

本課の文は我が國歴代文學の本質と展開の模様を論じたのであるから、本課により、從來習得した日本文學の知識を整理し、研究方法の暗示を與へ、文學の觀方に就いても會得させ度いと思ふ。

氏は文學序説の第二版の序文の中に、「我國の文學は敘事、抒情、物語、劇の如き順序で有史以來三回の展開をなして居るのではないか」と述べて居られるが、今それを分類すると、古事記、萬葉、古今の和歌、伊勢、源氏等の物語、謡曲、徒然草及び親鸞等の遺文に至る第一期、今昔物語、平家物語等の敘事文學より、俳諧等の抒情文學、お伽草紙から西鶴の物語となり、近松の戯曲となつた第二期、第三期は、明治十年代の外面的な政治小説に始まり、新體詩が榮え、小説の時代がとゞき、批評主義の精神が起つた今日に至つて居るのである。本課に採つた部分は原文に比して、非常に縮少され

ては居るが、系統的に大體を把握させることが出来れば十分である。

第一期。

一、日本最初の……求心的精神そのものに求めなければならぬ。(一七六頁四行まで)

第一期の敘事文學は何れも國家中心の求心的精神から生じて居る。

二、古事記を……印象を受けることが多い。(一七八頁一行まで)

第一期における抒情文學に就いて述ぶ。一七六頁の終までには敘事文學より抒情文學の生れる理由、次に、古今と萬葉との比較論。

古事記の國家中心の精神は、萬葉時代に入ると、自我覺醒となり主観の強調となり、その結果抒情詩が生れるに至つた。萬葉と古今を比較すると、前者は生きた利那を歌ひ、自然に作られたに對し、後者は、利那の過ぎゆくを嘆き、利那を留めんとし、技巧的に作られた感じがある。

三、平安朝の……自覺に上つてゐなかつた。(一八〇頁三行まで)

物語の發生、理由、物語の性質、並に價值について述ぶ。

初から「自我を連續の相のもとに見出さんとしたが爲であらう」までは、日記文學の生ずる原因を説く。

物語は、心情の歴史であつて、當時の人達は物語に最も充實した價值ある生活を見出したのであ

る。然し、平安朝の物語には尙精神的展開といふ事が自覺されなかつたのである。

四、展開なき……消閑の戲筆と見ることは不可能である。(一八二頁六行まで)

隨筆文學の發生並に徒然草に表はれた兼好を論ず。

展開なき連續が分裂に終つたもの即ち隨筆であつて、利那の緊張した斷想をそのまま書きつけたものである。枕草子、徒然草、は代表的作品で、新古今の新鮮味なるものも同一の傾向より生れたもの。

五、謡曲と狂言は……引上げんとするものである。(一八四頁一行まで)

第一期の文學展開における劇としての謡曲、狂言に就いて述ぶ。

第二期。

一、社會が……脱俗閑寂の趣味に赴かしたためであらう。(一八六頁まで)

第二期の敘事文學の發生の原因となる社會狀態に就いて述ぶ。

平安末より鎌倉を経て室町に至る時代は争亂起り、支配權を振つた時で、従つて社會的活動を主題とする敘事文學が起る。平安中期以來の歴史物語、鎌倉以後の戰亂物語は皆、之である。(一八四頁十二行まで)

鎌倉時代は新舊思想衝突の時期であり、文化の轉回期であり二種族抗爭の時代であつた。平家物語

はこの時代の反影といふべきものである。(一八五頁十行まで)
又この時代に國家意識が強烈となり、之等戦記文學を始め、實朝日蓮等に見られ其他の敘事文學を生んだ。(一八六頁五行)
鎌倉室町以後の文學には閑寂、脱俗の趣味が著しいが、それは社會の動搖に對する反動より生じたものである。

二、また幕府が……復活せしめんと勉めたのである。(一八八頁十二行まで)

第二期に於ける抒情文學に就いて述ぶ。此の期の抒情文學は、幕府の抑壓の爲に主情主義が否定され、従つて完全な發達を遂げなかつた。(一八八頁初行)

國家の健全なる状態に歸らんとする心と、心情の自由を求むる心、之が國學者の事業となつてあらはれたのである。

三、第二期の……感情によつて繋いで居る。(一八九頁十二行)

第二期の物語の状態を敘す。

四、淨瑠璃は……抒情的なものとなつた。(一九〇頁十行)

第二期における戯曲としての淨瑠璃について述ぶ。

五、要するに……その精神を高めるやうなものをもたぬ。(一九一頁四行)

第二期の結論。

第三期。

一、第三期文學は……政治思想家であつた。(一九一頁一行)

明治初期においては國家意識強烈にして、政治思想盛であつた爲に政治思想に始つた。

二、維新後において……鋭くめざめたのである。(一九三頁四行)

次に第三期の抒情文學について述ぶ。

三期においては、主情主義の色彩濃厚となり新體詩が漸く榮え出した。

三、馬琴の流を汲む……漱石はかゝる道をたどつた人である。(一九四頁十二行)

第三期の小説に就いて述ぶ。

明治の小説は硯友社一派の寫實主義に始まつて日露戦争後、明治の終まで自然主義が隆盛を極めた。而して自然主義の時代において、漱石等を中心とする餘裕派が別の道を歩いて居た。

四、明治の文藝思潮……第四期の展開が始まらんとして居る。(一九五頁九行)

第三期の結論。

第三期は外國文學の影響が甚しかつたといふ事及び非常に短い間に展開を終つたといふ事が特色である。

結論。(第一期の文學は……終りまで)

第一期より第三期に至る文學展開の結論、並に、來るべき第四期の豫想を述ぶ。

解 釋

本課に出て來る文献の説明に關しては、詳細にする必要を認めないから、上欄の解説以外に簡単な説明を加へ、参考書の名を二三擧げるとせよと思ふ。

【古典】 コテン。二義あつて、一は古の典型法式(天國)であるが此の場合は古き典籍、古の經典。の意である。

【古事記】 コジキ。教科書上欄参照。古事記は日本書記、萬葉集と共に日本上代の最も重要な文献の一であつて、文學であり、歴史でもあり、神話でもあり言語資料でもある。紀の歴史的要素多きに比して、より文學的要素

が多く、従つて文學的價值も非常に高いものである。註釋書は非常に多いが、本居宣長の『古事記傳』は最も勝れ、最近のものとしては次田潤氏の『古事記新講』はいゝものである。津田左右吉氏の『古事記及び日本書紀之新研究』高木敏雄の『日本神話傳説の研究』和辻哲郎氏の『日本古代文化』武田祐吉氏の『上代國文學の研究』高橋健自氏の『鏡と劍と玉』『古墳と上代文學』などがある。

【年代的記録】 年を逐ふて書く形式の記録をいふ。之に對して列傳體の記録がある。之は史記の如く又は大鏡の如き書き方である。

【祝詞】 ノリト。古代祝詞の現存するものは、延喜式八卷に收載されてゐる二十七篇が

主なるもので、他に豪記別記に中臣壽詞、日本紀顯宗紀に室壽詞がある。延喜式は延長五年十二月二十六日(一五八七年)の撰進であるが祝詞の成立はそれよりも極めて早く、奈良朝以前と思はれる。以來幾度か改竄を経て、現存の如き形となつたのであるが確定的に製作年代を定める事は出來ぬ。作者は勿論個人の手になつたものではなく當時神祇官として中臣、齊部二氏が世襲的に國家の祭祀に預つたから従つて祝詞も二氏の手によつて作られたものであらう。祝詞の語義は「のることば」、即ち人間の意志を神祇に白す祠の意で、祈願若くは祝福の目的である。祝福の意

を持つものを特に壽詞といふ。

【日本の精神】 日本人に特有の精神、國民性。

【求心的精神】 求心力とは、物體が圓運動をなす時、中心に引きつけんとする力をいふ。——的精神は圓の中心へ集らんとするが無く民族全體が一つの中心に向つて集まり、統一團結せんとする精神である。求心に對するものは遠心といふ。

【萬葉】 マンエフ。萬葉集のこと。撰者、成立年代共に確定せず尙研究の餘地があるが、撰者としては、古來五説程あり、諸説紛々として居るが家持が最も力を注ぎ卷一卷二などは勅撰されたものであらうといふ。成立したのは稱徳の頃で平安時代までに更に改定を

加へられて現在の形となる。廿卷。長歌二百六十二首、短歌四千七十三首、旋頭歌六十一首、計四千四百九十三首。部類としては、雜歌、相聞、挽歌、譬喻歌、四季、四季相聞、である。主なる註釋書としては、仙覺の「萬葉集註釋」、契沖の「萬葉集代匠記」、賀茂真淵の「萬葉考」、「冠辭考」、本居宣長の「玉の小櫛」、橋千蔭の「萬葉集畧解」などあり、之等を大成したものに「萬葉集古義」があり、木村正辭の「萬葉集美夫君志」は注意すべきものである。萬葉集は獨り奈良朝の代表的文學作品たるのみならず、源氏物語、近松の淨瑠璃と並んで我國文學中の最高峰に立つものである。

【遠心的精神】 求心に對した語で、中心より

遠去かつた、即ち國家中心の精神ではなく個人が各自獨立せんとする精神。

【國家の觀念】 國家といふ觀念。

【觀念】 クワンネン。感覺知覺などの心の刺戟に去りし後、留りて心に在る想像概念などの稱。【字源】意識内に把持せられたる寫象 (Image) 現在の刺戟なしに起る想像、概念などの稱。【天國】

【義務】 ギム。(一)分に應じてなすべきつとめ。【本務】。(二)法律上必ず果さざるべからざる責任。權利の反對。【字源】

【權利】 ケンリ。(一)權力と利益と。(二)法律の保護によりて各人の意志を主張し得る力

【字源】

【倫理的個人】 リンリテキコジン。嚴密な意

味で言へば多少違ふが倫理は道德と同じ意味で即ち道德上の個人の意。自然人に對する語。「公明正大にして正義の主體云々」の前に、原書には「日本民族は決して一種族から成つてゐるのではない。個人、家或は種族はそれを基礎として固執すればする程互に衝突し、争鬭を惹き起すべきものであつて、決して全一態に導くものではない。かゝる時代には腕力が支配し、唯征服者と被征服者との自然があるばかりで決して個性を有する文化人はあり得ない。抒情詩は主觀の強調であるが弱肉強食の時代には感情の世界に生きる事は許されないのである。」(一二〇頁参照)とあるから明に道德に規律された個人の義である。

【内的生活】 精神生活のこと。

【個人的享樂】 コジンテキキョウラク。一個人のみ味はひ得る享樂。享樂とは快樂を享受すること。たのしむこと。

【主觀】 シュクワン。Subject 物事を觀想する自身。觀想の主體。客觀の對。

【主觀的】 自身を基礎とし、自身に對する關係にて觀察するにいふ語。

【敘事文學】 ジョジブンガク。主觀をさけて、客觀的な態度で時間的に發展する動的事實を描いた文學。土居光知氏は「多くの民族の敘事文學は韻文であるが我國のそれは主として散文である。之は既に意識的になつた政治的動機が支配した爲である。」と言つて居る。

【動機】 行動の因りて来る直接の原因。
【種族の多數態の統一】 (三)以上の數を多數といふ。凡俗、習慣、國民性の異つた種族が多い場合それらを統一すること。紀記に表はれた、國家統一の求心的精神のことである。

【抒情文學】 ジョジョウブンガク。敘事文學に對する語。主觀的な感情を抒した文學。和歌や俳句の大部分は之に屬す。

【古今】 コキン。古今和歌集のこと。本書十八課の古今の歌の部において詳し。

【刹那】 セツナ。佛語。極めて短き時間、俱舍論「時之極少者名刹那」(字源)

【色も香もの歌】 「櫻のもとにて年の老いぬることを歎きてよめる、紀友則」とある。「あ

らたまる」とは昔にかはる、新しくなるの裏でない。この櫻は色も香も變りなく昔の通りに咲くであらうが年を取つた人はサ櫻とは違つて昔の若い時とは存外に變つたわい。

評、劉廷芝が代悲白頭翁の詩に、年々歳々花相似、歳々年々人不同。とある句をそのまゝ譯したやうな作である。變る變らぬの表裏の意を上下に對抗させて文をなした。二句、六帖に「昔ながら」とあるに比べれば詞は巧である。また三句にさくらといふ語をたち入れて、所謂物名のよみ方になつて居る。宣長がこれを叶ひ難いと非難したのは作者の意をよく聞き取らぬからの説である。實詠であるが餘にいひ過して餘韻に乏しい。(金子元臣・評釋)

【花の色はの歌】

「移りにけりな」は變つてしまつたわいなあの意「徒に」は口語のむだにに當る。「ふる」にかゝる副詞。「世にふる」は世の中に終るの意、年の寄ることに言ふ。又「ふる」に「降る」の意をかけた。これは長雨の縁結。「ながめ」長目の義で物思する時は何となく一方が見詰められるものであるから長目といふ。それに長目をいひかけた。大意は、見むとたのしんだ花の色は早くも變つてしまつたわいなあ、役にも立たぬ自身の老を歎いて物思をしてゐた間に降つた雨にサ。

評、つれづれな暮春の霖雨に屈託して居る間に、庭前の花の花はあせて見る影もなくなつたのを見て、それに寓せてわが生活苦に没頭

してゐる間に、容貌の美の衰へてゆくを歎息したのである。元來譬喩を混用した構成だから勢ひ巧緻なるべき筈ではあるが下句の秀句勝な仕立などあまり面白くない。さはいへこれも上手の仕業である事は勿論で、そのやらいだいひなしは當に女流の歌である。耳立ち易い「に」の辭の四つまでも重なりながら聲調のなだらかなのを古來稱美してゐる。又「世にふる」の解に諸説まち／＼であるが今は石原正明の説に據つた。(評釋)

【梅が香をの歌】 「寛平の御時きさいの宮の歌合の歌」と詞書あり。「とゞめてば」留めておいたらばの意。「かたみ」紀念となるもの。「まし」ましをの意。大意、梅の香を袖へ染まして留めておいたらば春はよしや過ぎて

も、其の香が春の形見であるだらうに、然し
さうする手段もないので残念な。評、散り方
の梅に對した感想である。散るのはいかにも
惜しいが禁めようもないのでせめて其の匂ひ
だけでも留めて形見としたいと思ふがそれさ
へむづかしいと嘆いてゐる。四句、直叙すれ
ば「花は散るとも」とあるべき處なのを轉義
して「春は過ぐとも」と一層誇張したので婉
曲な味がある。「評釋」

【感傷的】 カンショウテキ。感じ易く涙もろ
く様。廣辭

【焦燥】 いらだちさわぐ。

【印象】 インショウ。(Impression) 【哲】(一)
吾人が現在直接に物に觸れて得たる感情が深
く心に銘じて活き活きさせる心の有様。(二)

今日心理學上においては、上の如き心の状態
を言はずして、寧ろ他物の刺戟を受けて感覺
を生ずるに當り、感覺機官、神經組織などに
起る生理的作用をいふ。

【個體的】 個體とは、個々に分れて獨立の存
在を保持するものを言ふ。個體的は典型的に
對する語で、個體の状態をなしてゐる様であ
る。

【典型的】 かたにはまつた様。

【想像力による構成的表現】 事實の描寫で
はなく想像の力によつて組み立て一つの物語
として表現すること例へば物語を創作する事
などは之であらう。

【平安朝の女詩人】 此の場合の詩人は一般
に文學者の意で紫式部、清少納言始め和泉式

部、赤染衛門等の歌人等も皆含める。

【年代史的な外面的歴史、心情の歴史】

原書にこの文章の直前に「紀記は外なる世界
の歴史であり、萬葉は内なる世界の刹那の告
白であり、物語は心の世界の歴史である。」と
あるによつて理解出来る。

【源氏物語】 平安朝の代表的文學作品たる
同時に世界的に勝れた小説として恥かしから
ぬものである。紫式部の著したもの。全部で
五十四帖、初四十一帖は光源氏を中心として
その花やかな生活を描き、次の三帖は薫君等
の生立を描き、後の十帖は薫君を中心とした
失意の半生を叙して居る。而して場面を宇治
に取つて居る處から宇治十帖といふ。成立の
年代に就いても確定出来ないが長保の末、寛

弘の首、式部の寡婦生活に於て記されたが完
成したのはやゝ後の事である。「源氏」の註釋
書は非常に多いが主なるもの二三を挙げば、
北村季吟の「湖月抄」、眞淵の「新釋」、宣長
の「玉の小櫛」萩原廣道の「源氏物語評釋」
など注意すべきものである。

【螢の卷に紫式部は云々】 螢の卷は第二十
五卷目である。本文に引用した文章は、源氏
が名義上娘分になつて居る玉蔓に、物語に就
いて趣意を語る處の一部である。

【紫式部】 藤原爲時の女、藤原宣孝の妻、夫
歿後上東門院に仕ふ。天延二年(一六三四)
生、長元四年歿年五十七。源氏物語、紫式部
日記の著あり。

【かたそぼぞかし】 その一部分を記してあ

るに過ないのだ。

【これ等】 假名文の物語で今こゝにある繪物語などを指す。源氏が玉蔓の許に來て繪物語の批評をして居たのである。

【道々しく】 尤もらしく。

【その人の上】 誰その事

【言出づる】 書くこと。

【聞くにもあまる云々】 聞き放しの出來な
いまで衝動を受けて心一つに包みきれず後に
までも傳へたく思ふ節々を書いて残すやうに
なつたのだ。

【更級日記】 サラシニニツキ。菅原孝標の女
の著。寛仁四年十三才の時、その父の任國上
總から上京する際より筆を起し、幼き彼女が
憧憬に充されて富士山を眺め、京に接し、而

かも夢と憧憬とが破れてゆく心持が、つつま
しく書いてある。後橋俊通の妻となり、子仲
俊を生み、五十歳で夫に別れた頃までの記述
である。田舎の叔母の土産として物語を多く
貰つて喜び、寝る間も忘れて耽讀したり源氏
の中の浮舟に憧れる等、夢多き心持が現れて
居る。

【几帳】 キチヨウ。臺に柱を立て、之にとば
りを掛けたる具。古昔貴人の座側に立て、内
外の隔てとした。今の衝立の類。

【いみじき事に思ひ】 非常に嬉しい事と思
ひ。

【潑刺】 魚のとびはねる貌。

【枕草紙】 第二十三課参照。

【隨筆】 筆にまかせて何くれとなく記載した

文書。國語と國文學第三十六號、國語國文學
本質號に佐藤幹二氏が「隨筆文學の本質」を
書いて居られる。それによつて、その特質を
列擧すると、

第一、自然及び人生に對する見聞であること
生活記録であること。

第二、内容題材が多様豊富であり従つて斷片
的であるといふ事。

第三、即興の筆觸であり、自由の精神がその
母體であること。

第四、清閑靜寂の精神がその産婆であるこ
と。

第五、主觀的調子と人格的色彩の濃厚に表現
せられたる文學であること。

繰返し要約して本質如何といへば自然及び人

生人事に對する愛と理解とを豊かに有てるも
のが、その見聞、印象、感想、意見などを
何等の拘束なく極めて自由の立場にありて、
清閑靜寂の環境にありて、本然の我を投入し
て主觀的態度を強固に持しつゝ、感興の動く
がまゝに、或は連想の糸をたぐり、或は斷想
の刀をかざして、而も直接的に且つ斷片的に
表現描寫せるものである。と氏は述べて居ら
れる。

【新古今】 十三課参照。

【彼岸】 佛經の語。生死を此岸とし、涅槃を
彼岸とす。菩薩、無相の知恵を以て、禪定の
舟航に乗じ、此岸より彼岸に到らしむと言
ふ。

【對立の一半をすてゝ】 社會と人生を捨

るか、又は自然の愛、彼岸の宗教を捨てるか。

【つれづれ】 土居光知氏は文學序説に、つれづれとは展開なき沈滞のなやみ、充實した人生を見出し得ざる悶へではあるまいか。兼好が「つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて心に移りゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつくればあやしうこそ物狂ほしけれ」と書いた序文は、充實した生活、展開する思惟に入る事が出来ぬ。この途を見出さんが爲には分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して我の姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずるといふ如き意味ではなからうか。」と言つ

て居る。

【つれづれわぶる心は云々】 「徒然草」つれづれわぶる人はいかなる心ならむの段参照。
【官能的】 クワンノウキテ、官能とは生物が具有する生理上のはたらき。五官の働きをいふ。「官能的である」とは五官のはたらき鋭いの意。兼好が非常に官能的であつた事は、「世の人の心をまどはすこと」及次の段参照。
【平安朝の教養】 物のあはれ、即ち情趣を解する事がその最なるものである。
【有職】 イウソク。イウシヨク。イウソコ。へいものしり。學者(二)轉じて朝廷又は武家の禮式、典故を知る人。故實家。有職とも書く。
【有職者ぶり】 「今の内裏つくり出されて」の

段等参照。

【古き世を戀ひし】 「何事も古き世のみぞ慕はしき」の段参照。
【戀愛を讚美し】 「よろづにいみじくとも色好まさらむ男は」の段等参照。
【家居の趣味】 「家居のつきづきしくあらましきこそ」等参照。
【戀愛を否定し】 「女は髪のためだからむこそ」の段参照。
【清貧を崇拜し】 「人はおのれをつとまやかにして」の段等参照。
【名利を云々】 「名利につかはれて靜かなる暇なく」の段参照。
【未完成の精神を尊び】 「羅の表紙はとく損するがわびしき」の段参照。

【無差別論者で】 「名利につかはれて靜かなる暇なく」の段及び「眞乘院に盛親僧都とてやむことなき智者ありけり」の段参照。
【皮肉】 ヒニク。骨身にこたふるほど鋭利なる非難をなすこと。意地悪く遠まはしに反對すること。(大國)

【諷刺】 フウシ。とほまわしに非難すること。それとなくそしること。あてこずること。
【論理的】 議論のすぢみちのかなつた。
【消閑】 ショウカン。ひまつぶし。
【謠曲】 第四課攝待の處に説明した。
【狂言】 第五課「宗論」の處参照。
【劇】 ゲキ。戯曲。Drama。通常舞臺に演ずる爲に書かれる散文又は詩の形式の所作をい

ふ。獨白、對話、役者の動作、背景、事件、人物の性格の發展等によつて成立するものである。

【能】ノウ。散樂サルガタより發し應永の頃、足利義滿の時觀世阿彌の創めたもの。嘶子には笛、小鼓、太鼓、大鼓を用ふ。演劇發達の初歩たる單純な形式で行はれるが簡古、優雅な趣味を持ち藝術的價值も頗る高い。

【散樂】サルガタ。猿、又は申とも書く。最初は諧謔等一時的の戯れとして演ぜられたが轉じて音聲歌舞備り職業として演ずる戲藝、傀儡、品玉等となつた。能は之より生じた。猿樂の四座などと言ふものがある。

【田樂】デンガク。此の名稱は平安朝の榮花物語等から見え、樂器として腰鼓、笛、佐々

良を用ひ、鼓を田鼓といふより田樂の名起ると言はれてゐる。高足一足の舞などいふのもあり主として輕業、手品(品玉、刀玉など)をし、滑稽、茶番、狂言の類だつたが鎌倉中期には、田樂法師など現はれるに至つた。田樂が能と關係ある事は、觀阿彌が田樂の名人(花傳書)を師と仰いで「風體の師」となした事によつても判る。

【曲舞】クセマヒ。鎌倉末より足利初に於て流行した女舞で拍子を主とし、裝束は白拍子に似て、水子、大口、立烏帽子、等を用ひた。

【元曲】ゲンキョク。支那の元時代に流行した雜劇のことである。支那の戲曲は大抵古い歴史的事實の一條を敷衍し、作者の意匠によ

つて運旋したものであつて、その脚色は複雑ならぬものを善とし、音感による文詞といふ事に努力した。即ち見るよりも聞くべきものであつたのである。作者として有名なのは、喬夢符、揚顯之、關漢卿、馬致遠などあり、曲數は頗る多く、今日では「元曲百種」に残されてゐる。

【世阿彌】セアミ。結崎氏。觀世元清。清次(觀阿彌)の次男、能藝術を大成し、義滿の寵遇を受けた。然し晩年は悲慘で、甥の音阿彌の爲に陥られ七十二歳の老體を以て佐渡に流された。世阿彌は謡曲作者たると共に能の實演者で、その藝術觀は世阿彌十六部集に見られる。尙、彼の著に金島集もある。

【解脱】ゲダツ。佛語、煩惱の縛を解き、三界

の苦を脱すること。世俗の念を脱離すること。(天國)

【禪僧】ゼンソウ。禪宗の僧。又座禪を行ふ僧。(天國)「禪は梵語の禪那(Dhyana)の畧。(一)俗縁を離れ、心を靜めて眞理を觀ずること。妄慮、雜念を去りて無我、寂滅の域に達すること。(二)禪宗の畧。(三)坐禪の畧。

(天國)「坐禪」座禪とも書く。靜かに默座して悟道を求むること。多く禪家にて行ふ。(天國)【醇化】ジュンクワ。哲學にて雜駁なる知識を分類して純粹に且つ組織的ならしむる作用。(字源)、(天國)醇は純、淳(あつし)。等の意あり。

【悲壯】ヒソウ。(一)なげき悲しみて意氣の振ひ立つ事。(二)悲壯美の畧、衝突の解決が

現象世界において絶ゆる時美と認めらるゝもの。即ち自己の存在を断滅し、死を須要の制約とすること。

【観照的な愛】 クワンシヨウテキナイ。自己のみに即して考へた愛ではなくて廣く自己以外の存在を認め、それを明らかに知つた上に於て生じた愛。

【情操】 ジョウソウ。Sentiment 眞理を尙び、美を愛するが如き感情で、最も複雑なものである。學理上の疑問解決、道德的行動の遂行、藝術 鑑賞、宗教的信仰に伴ひ起る複雑な感情等の如きものである。此を知的情操、倫理的情操、宗教的情操に別つ事が出来る。

〔文辭〕

【社會意識】 社會一般の有する意識。意識と

は、知覺とか情意等の心の現象をいふ。

【大鏡】 オホカミ。文徳天皇より後一條天皇の萬壽二年までの列傳體の歴史物語 初に序があつて、雲林院の菩提講に大宅世繼、夏山繁樹といふ老人が行き合ひ、若侍も一緒になつて、世繼が主として語り、繁樹合槌を打ち、若侍が批評するといふ趣向になつて居る。文章簡潔、批判的な點に特色がある。

【戦記文學】 センキブンガク。鎌倉より室町時代に至る期間において、戦争を主として敘した文學であつて、鎌倉時代には保元、平治平家、源平盛衰記、室町時代に入つて太平記會我物語、義經記などがある。

【人生觀】 人生の目的、價值、手段等に関する觀察。〔因國〕

【情緒的】 ジョウシヨテキ。情緒に富む貌。

情緒とは(一)思ひにつれて起る情のはしく(二) emotion 觀念に伴つて起る稍複雑なる感情、主に生理上に起因す。單純なる、感情と情操との中間に位し、喜怒哀樂等最も吾人日常の生活に關係あるもの。〔廣辭〕

【感受性】 カンジュセイ。感性に同じ。感覺の能、直感の力。〔廣辭〕

【意志的】 意志の力が他の知、情に比して多し貌。

【實朝によつて歌はれ】 その家集を金槐和歌集といふ。實朝は三代將軍として天下の政權を掌握して居たとはいへ生來蒲柳沈鬱の質である上に、北條氏の爪牙逞しくして武人としての地位は決して安固でなかつた。彼の僅

か二十八歳の生涯を飾るものは歌人としてある。實朝は定家に和歌を學んだが後、萬葉集を贈られてより、萬葉の歌風を得、清新なる調を開いた。

【日蓮の宗教的豫言的熱誠】 日蓮の傳に就いては、第十課の處において述べた。日蓮宗の始祖で念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊と叫んで自らの宗旨の弘通に務めた。立正安國論に彼は豫言的に國難を指摘して居る。その大意は、淨土念佛の如き謗法的消極的な末梢に墮した宗旨を停止して法華一乘の妙法を受持しないと、諸天善神は此國を去つて、兵革の災、他國侵逼(外寇)自界叛逆(國內の同志討)の二難が必ず至るであらう。それは諸經文の固く立證する處だ」と豫言したのであ

る。蓋し、「藥師經」「大集經」「金光明經」など「國家が正法を捨てた場合には宗教も人もすべて不正に陥り、必ず三災七難を生ずる」といふ事が明示されて居るからである。」といふのである。

【弘安の役】 ヨウアンのエキ。弘安四年、元兵、壹岐を侵し、太宰府に逼らんとしたが七月、颶風の襲來により艦船轉覆し全滅した。

【閑寂】 カンジヤク。靜かにしてさびしいこと。

【脱俗】 ダツゾク。世俗の氣習をはなれたること。

【中庸】 チユウヨウ。偏せざるを中といひ、易らざるを庸といふ。物事の過不及なくほどよること。

れた現實味を離れた枯淡な句。

【寂びたる體】 之も俳句や連歌などに用いられた閑寂な味ある體をいふ。芭蕉のさび、しをり、ほそみなどは枯れたる句、寂びたる體に言はれたものである。

【瓢輕】 ヒョウキン。剽輕と因圓にあり。輕卒にして滑稽なること。氣輕にしておどけたる氣象。因圓

【洒脱】 シヤダツ。洒はソング、アラフの意。さつぱりしたること。

【狂歌】 キョウカ。狂歌とは和歌に對する名稱で滑稽味を含んだされ歌を意味し、一面に於て調子の卑俗なる和歌といふ意味を持つ。狂歌の源流は古今集の俳諧歌まで溯ることが出来るが所謂狂歌として文學の一形式となつ

【主情主義】 シュジョウシュキ。Sentimental-

ニヨ 十九世紀の初葉、ロマンテイシズムに伴ふて起つたもので、その特徴を舉れば第一、感情が非常にデリケートで刺戟され易い傾向ある事、第二に、感情が心の全部を支配し、理性にも勝てる傾向のあることである。物事に感じ易く涙脆いなどいふ傾向で、之を謳歌するのが此の主義である。

【封建制度】 ホウケンセイド。諸侯に封土を與へ之を世襲せしめ、一定の大綱を授けてその領内の政治を取り扱はしむる制度。

【俳諧】 ハイカイ。連歌の發句を一首とする即ち五・七・五の三句より成る。俳句、發句とも言ふ。

【枯れたる句】 連歌、俳句などにおいて取ら

たのでは徳川中期天明頃である。作者としては半井ト養、石田未得、四方赤良、宿屋飯盛ノボリイカサ、手柄岡持、北川眞顔等がある。

【光圀】 ミツクニ。明暦三年彰考館を置き、弘く天下の碩學を招き大日本史の編纂を始む。著書すべて百餘種、就中「大日本史」禮儀類典、「扶桑拾葉集」最も名高し。「作者辭典」

【長流】 ナガル。氏は下河邊シモカウベ。大和龍田に生れ、江戸に出たが志を得ず、難波に歸つて隱棲し、學問や和歌の道にすべてを忘れて生涯を送つた。釋契沖と莫逆の契を結んだ事は契沖の「われを知る人は君のみ、君を知る人も多くはあらじとぞ思ふ」といふ歌によつてもわかる。萬葉集管見、自撰晩花集

の著がある。

【契沖】 ケイチユウ。江戸時代の國學者。名は空心。俗姓下河氏。攝津尼崎の人。大阪圓珠庵に晩年を送る。光圀の依頼により、萬葉代匠記二十卷總釋二卷を作つて上る。著書に「古今餘材抄」「古事記抄」「書紀竟宴頭書」「古語拾遺抄」「厚顔抄」「勢語臆斷」「和字正濫抄」等あり。〔作者辭典〕

【愆憑】 ショウヨウ。誘ひすゝめる事。

【眞淵】 マブチ。江戸時代の國學者。歌人。京に出で荷田春滿に就きて古學を學び苦學十年、業成りて江戸に下り日本橋濱町に住し縣居と號し學徒に授く。後、田安宗武に聘せられ寶曆十年辭し専ら著述に従事し明和六年歿す。年七十三。歌文は奈良朝を以て理想と

し、和歌は特に萬葉を模範とすべしと説けり。著の主なるものは「縣居歌集」「縣居翁集」「加茂翁遺草」「歌意考」「國歌論臆說」「萬葉考」「祝詞考」「源氏物語新釋」「冠辭考」等なり。別に「加茂眞淵全集」あり。〔作者辭典〕

【宜長】 ノリナガ。伊勢松坂の人。鈴廼屋と號す。少時京に出で、儒を堀景山に、醫を武川法眼に學びて歸り醫業を開き傍ら國典を攻究す。三十二歳の時賀茂眞淵の來遊に遇ひその門人となりて益々力を國學に注げり。「古事記傳」を始め「源氏物語玉の小櫛」「萬葉集玉の小琴」「詞の玉緒」等多し。〔作者辭典〕

【溷濁】 ユンダク。溷はミダル、ケガルの意濁れる事。

【闡明】 センメイ。明らかならざる意義又は隠れたる道理を明らかにのべあらはすこと。

【浮世草紙】 ウキヨサウシ。江戸時代、當時の世態、人情を寫し出したる小説(因國)浮世とは廣い意味の人生であるが狭く言つて好色の意。世を知るとは男女の道を知るの意味に用ひられてゐる。〔國文學史總說〕

【西鶴】 サイカク。井原氏。初め西山宗因を師として談林派の俳人だつたが四十一歳の時(天和二年)好色一代男を出してより浮世草紙の作者として立つた。彼の浮世草紙は大體好色物、町人物、武家物の三種に分れる。好色物には好色一代男、好色一代女。好色五人女が主なものであり、町人物としては日本永代藏、胸算用がすぐれ、武家物には武道傳來

記、武家義理物語等がある。

【談林】 ダンリン。檀林ともいふ。田代松意談林軒(西山宗因の高弟)が江戸で同志と共に俳諧を始めて談林と稱したに始まるといふ説もあるが延寶三年西山宗因が江戸に出て「さればこゝに談林の木あり梅の花」と言つてから始まると見るのが通説である。談林派は宗因を中心として菅谷高政、田中常短、井原西鶴、一時軒惟中等である。

【奇警】 キケイ。すぐれてさとし。

【戲作者】 ゲサクシヤ。戲作に従事する人。小説家。戲作とはたはむれの著作、稗史、小説の類。(因國)

【近松の作品】 時代物としては國姓爺合戦、世話物に曾根崎心中、冥土の飛脚、博多小女

郎浪枕、心中天の網島、心中宵庚申、女殺油地獄、八百屋お七、心中二つ腹帯、鎌倉三代記などあり。

【馬琴の作品】 里見八犬傳、椿説弓張月、朝比奈巡島記、近世説美少年録等が代表作。

【標榜】 ヒヤウバウ。かゝげ記すこと。あらはすこと。

【浄瑠璃】 ジョウリリ。詞章と曲節と人形操とがら成る綜合藝術で、曲節、詞章は平家、謡曲其の他を綜合して作られたものである。

浄瑠璃の起源は室町時代、宗長日記享祿四年の條に宇津山邊で語つた記事があるから既にこの頃相當に流行してゐたらしい。淨るりの最古のものは浄瑠璃十二段草紙がある。作者としては、近松門左衛門、紀海音、竹田出雲

近松半二、並木宗輔等がある。

【幸若舞】 コウワカマヒ。猿樂と並び行はれて當時の武人に歓迎されたもので桃井播磨守直常の孫直詮が創めた。その幼名を幸若丸と言つた處からこの名がある。舞々とも言ひ、足利義政の頃から行はれ近世にかけて盛であつた。雍州府志に、幸若丸の事を説いて「一種有_二舞々_一。凡舞有_二兩流_一。越前幸若流並大柏流是也。幸若自稱_二桃井直常之裔_一、代々領_二公方家之祿_一。其舞詞或戰場之事、盛衰之變、戀慕之情、種々有_二三十番_一。其後所作是號_二新曲_一。其所_レ唱曲節音聲與_二猿樂之所_レ唱大同小異。是亦有_二太夫_一。其左右二人連舞、是稱_二連又謂_二脇大小鼓助_一之。と言つて居る。幸若舞の詞を舞の本といふ。

【御伽草紙】 オトギソウシ。室町時代において作られた物語で、空想的、想像的要素が濃厚である。教訓的要素もあるが要するに童蒙的女子の伴侶に過ない低級な小説と言ふべきである。

【浄瑠璃十二段草紙】 牛若丸が金賣吉次に伴はれて東下りの途次、三州矢矧の宿の長者の申子、淨るり姫と契り、別れて後、駿州吹上の濱にて重き病に臥したが、たづね下つた姫の介抱を受けて快癒し、再び別れて秀衡の許に着する迄を次の十二段に分けて敘したのである。作者は小野お通と傳へる。

【世話物】 セワモノ。現代又は近世の出來事又は平民的事實を脚色せる院本、小説又は演劇など。時代物の對。

【徳川の俗謡】 ソクエウ。江戸長唄、河東節、一中節、常盤津、富本節、清元、新内、豊後、などの淨るり節や踊歌、江戸端唄、等下流社會に流行した唄。

【情調】 おもむき、きもち。廣辭

【旋律】 センリツ。melody。音樂にて樂音の或方向に進行して規則正しく連続せるもの。廣辭

【時代物】 ジダイモノ。古昔の傳説、又は歴史上の事實を脚色した院本、小説、又は演劇など。

【度外視】 ドグワイシ。法度外に置くこと。かまはぬこと。すておくこと。大宇

【重心】 チウシン。物體の各部に作用する重力の合力が通過する點。

【人道主義】 Humanism 人道とは人類の履行せざるべからざる道義、人倫の道德。——主義は人道を要旨とする主義。

【國會開設】 明治十四年。

【新體詩抄】 シンタイシショウ。日本における最初の新體詩の詩集。テニスン、ロングフエロー、キングスレーなどの詩の譯が主であり、グレーの挽歌、シエークスピアのヘンリー四世、ハムレットの一節なども譯されて居る。形式は大てい七五調だが言葉の洗練されない詩味の乏しいものである。〔國文學史總説〕

【透谷】 トウコク。(八課参照)

【藤村】 トウソン。(詩四篇参照)

【草ざうし】 クサざうし。始め、薄様の還魂

張したものである。上卷には小説の本質を始め、その變遷の跡を述べ、小説の種類、目的などを細説して居る。下卷には小説の文體、結構、主人公の性格、描寫の方法などを述べ。その要點は、(一)ノベルとロオマンストの區別を明かにした事、(二)觀善懲惡主義を排して寫實主義を高調した事、(三)心理描寫、客觀的描寫の必要を述べた事、(四)文學者が人生批判の目的を以て筆を執るべき事、などを主張してゐる處にある。こうした主義を具體化したのが長篇小説「當世書生氣質」である。(高須芳次郎現代文學十二講)

【浮雲】 ウキグモ。三卷、その内容は、某省の判任官内海文三とその従妹お勢とを主人公として、それへ叔母お政や文三の友人本田な

紙(スキガヘシ)を用ひて一種の惡臭ありし故に名づく。一説、草假名の雙紙の義ともいふ。江戸時代、繪入本の短篇小説、多くは平假名のみで書く。赤本、青本、黄表紙、黒本、合巻物、正本製等の種類あり。〔因圖〕

【傳奇物語】 デンキモノガタリ。傳記を小説體に潤色したるものがたり。明治初期の傳奇派中には歴史小説、人情小説などの類があつて、依田學海、村井弦齋、須藤南翠、塚原澁柿園、遅塚麗水、石橋忍月、宮崎三昧、山田美妙などがある。

【小説神髓】 坪内逍遙著、明治十八年發行。その内容は、畢竟「小説とはどんなものか」といふ問題の新釋で、正しい意義の上における小説や描寫の原理、方法を教へ、且つ、主

どを加へ、若き男の戀の暗闘を中心として時勢粧を反映しやうとしたものである。

【自然主義】 拾九世紀の中頃自然科学の勃起と共に、エミール、ゾラ等によつて唱へ出された主義で、一言に言へば、人間と其事象を純科學者の態度で觀察解剖し、現實の真相を有のまゝに描かんとするのである。

【寫生文】 シヤセイブン。正岡子規が「ほととぎす」に於て主唱したのである。俳句と同じく、純客觀上の寫生を重んじたもので現實主義思潮ゾライズムなど、相通じた點がある。

【漱石】 「吾輩は猫である」。「それから」「門」「三四郎」「坊ちゃん」「心」「二百十日」「行人」「草枕」「坑夫」「明暗」「彼岸過ぎまで」

「幻影の盾」「倫敦塔」等の小説がある。

【虚子】 虚子の小説は漱石のために、餘裕派
低回派のうちに組み入れられたが、必ずしも
さうばかりではなく自然主義的傾向が可なり
にあつた。「俳諧師」、續俳諧師「朝鮮」「柿
二つ」「風流懺法」「斑鳩物語」「三疊と四疊
半」「兄」などがある。

【餘裕派】 ヨユウハ。夏目漱石は虚子の「鷓
頭」の序に餘裕派、非餘派の小説を論じて自
然主義の小説を非餘裕派の範疇に入れて居
る。漱石の説に依ると、餘裕派の小説とは通
らない小説である。觸れない小説、雍容の味
ある小説だ、「人生には幾多の餘裕がある。茶
を品し花に瀆ぐ、繪畫彫刻に閑を過す、冗談
を言ふ、誦、釣、芝居、避暑などの如きも、

皆餘裕ある人生だ、それは又、正しく文藝の
材料たるべきものだ。それらを抜ひ、且つ描
いた小説には低徊趣味、依々趣味、戀々趣味
がある。」と言つた。

【自然派】 自然主義を稱へた一派である。明
治時代における自然主義運動は明治三十四年
より起り、明治末年に至る約十年間が盛であ
つた。その稱ふる處は、理想をすて、現實に
走り、善とか美より、眞を描かんとしたので
ある。その爲には、人生の醜をも暗黒をも客
觀的態度を以て觀察し、赤裸々に描寫すとい
ふのである。而して、自然派の人々には田山
花袋、島崎藤村、小栗風葉、徳田秋聲、永井
荷風、國木田獨步、正宗白鳥、眞山青果、中
村星湖、水野葉丹、上司小劍、小山内薫、窪

田空穂、徳田秋江、伊藤左千夫、長塚節、吉
江孤雁、等を擧げる事が出来る。

【創作】 自己の思考より文藝物を作り出すこ
と。

【諧謔】 カイギヤク。好笑の情緒を呼び起す
滑稽の言。面白味多き戲言。おどけ。しや

鑑賞

本課に依つて、我々は三千年の我が國文學の底を流れてゐる思潮の展開を明かにし、更に文學の中
にわれ等の祖先の精神生活の跡を眺めることが出来た。煩雜極まる國文學を快刀亂麻の勢でキビキビ
整理し、統一した點は何と云つても敬服に値する。

れ。

【文藝思潮】 文藝は學問と藝術、即ち詩歌、
文章、劇、小説、美術、彫刻等をいふ。思潮
は時代思想の傾向。

【追従】 ツイジュウ。あとをつけゆくこと。

新國文大綱卷十備考 (終)

昭和四年二月十日印刷
昭和四年二月十五日發行

〔非賣品〕

著作
權有

著者

平林治德

發行者

立川熊次郎
大阪市西區安堂寺橋通三丁目四十五番地

印刷者

北隅茂
大阪市西區阿波郡二番丁三番地

發行所

大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地

立川書店

終